

平成26年度

第3期

こどもみらい館研究プロジェクト報告書

— 平成24年度～26年度 —

子どもの育ちの連続性研究プロジェクト

子育て支援研究プロジェクト



京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館

ご あ い さ つ

こどもみらい館に北接する竹間公園の桜が満開になる頃、この冊子をお手元にお届けできることとなり、この上ない喜びに感じます。

日頃から京都市子育て支援総合センターこどもみらい館の様々な事業等に深い御理解と多大な御支援を賜りまして誠にありがとうございます。開館以来、毎年約40万人の方に御利用をいただき、15年目の節目となります本年度10月にはまさに600万人目の来館者をお迎えすることができました。

第3期「こどもみらい館研究プロジェクト」については、平成27年1月26日に報告会を開催しました。遠方からも含め多数の方々に熱心に御参加いただき、滞りなく終えることができました。発表者にとりましても、また研究に携わった全ての関係者にとりましても、多くの方々に御参加いただいたことは誠にありがたく、会場での御質問やアンケートでの御意見は今後の励みとなりました。心から御礼申し上げます。

今回の二つの研究プロジェクトは、人事異動や参加メンバーの交代など、研究を積み上げていくことが難しい条件の中で、中間報告会、最終となる今回の報告会を経て一定の成果を挙げ、今後への継続する課題等を抽出しながらの業績となりました。かかわりのありました全ての方々に感謝致します。

「子どもの育ちの連続性研究プロジェクト」は、様々な園(所)の先生方からなる「子どもの育ちに関するグループ」と、同一校区内にある保育園(所)、幼稚園及び小学校の施設単位からなる「保幼小連携グループ」の2つのグループ構成をとり、それぞれに「乳幼児期に大切に育みたい心の育ちとそれをその後の育ちにいかにつなげていくか」について考え、最後には気づきを融合し深めてまいりました。

また、「子育て支援研究プロジェクト」は、「何故、保育園(所)・幼稚園で子育て支援をしなければならないのか」ということについて本音で語るところから始め、様々な子育て支援施設や関係機関の視察、エピソード記述や事例を基に研究を深めてまいりました。

本研究プロジェクトは、こどもみらい館の特色である「共同機構」ならではの構成員で研究が進められており、机上での研究だけではなく、構成員である保育者が日常の保育内容の充実を図りながら進めてきたことが大きな特徴の一つです。

平成27年度からは、子ども・子育て支援新制度が実施されます。本研究プロジェクトの成果が京都市の就学前施設の保育、子育て支援の一助になればと願っております。そして、今後も更に新しい時代に即した研究を進めてまいりたいと考えております。今後とも、それぞれのお立場での御意見、また御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
館長 浅野 明美

目 次

第 1	研究プロジェクトの発足	1
第 2	各研究プロジェクトの取組とまとめ	3
	【子どもの育ちの連続性研究プロジェクト】	5
	I 研究主題と設定理由	5
	II 研究方法	6
	III 期間	7
	IV アドバイザー	7
	V 取組概要	8
	VI 研究内容	10
	VII 成果	42
	VIII 課題	42
	【子育て支援研究プロジェクト】	45
	I 研究主題と設定理由	45
	II 研究方法	46
	III 期間	46
	IV アドバイザー	46
	V 取組概要	46
	VI 研究内容	48
	VII 研究の成果	76
	VIII 今後の課題	77
	IX 子育て支援研究プロジェクトに参加して	78
第 3	研究プロジェクトのまとめ	83
	1 研究プロジェクト報告会の総括	84
	2 研究プロジェクトの総括	92

第1 研究プロジェクトの発足

第1 研究プロジェクトの発足

こどもみらい館は、少子化、核家族化、地域のコミュニティの希薄化など子どもたちを取り巻く環境が著しく変化する中、乳幼児の子育て支援を総合的に推進するため、保育園(所)・幼稚園、私立・市立・国立の垣根を越えた「共同機構」としての取組を行う全国に類のない子育て支援の中核施設として、平成11年12月に元竹間小学校・竹間幼稚園の跡地に京都市子育て支援総合センターとして開館しました。

相談、研修、研究、情報発信及び子育て支援ネットワークの構築の5つの機能を柱とし、また、親同士の交流、ボランティアの養成などの多彩な事業を展開する中で、家庭・地域の教育力の向上、保育士・幼稚園教諭の資質向上、乳幼児の子育て支援、更には関係機関相互のネットワークの形成に大きな役割を果たしています。

こどもみらい館が子育て支援の道標としての役割を果たすため、開館5周年を機に、平成16年度から第2創業期と位置付け、基本方針である「子育て支援の輪を地域・社会全体に広めていく」という取組として「就学前教育研究プロジェクト」「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」を立ち上げました。この3つの研究プロジェクトは5年にわたって取り組み、「第1期」として平成20年12月に報告会を実施、平成21年3月に報告書を発行いたしました。

そして、平成22年度には第1期の成果と課題を引き継いだ第2期として、「保幼小連携研究プロジェクト」「子育て支援研究プロジェクト」の2つの研究プロジェクトを立ち上げました。これらは2年間取り組み、平成24年1月に報告会を実施し、同3月に報告書を発行し、研究の成果を広く発信してきたところです。

こうした研究の成果と今日的な課題を踏まえ、保育内容の更なる充実・発展や子育て支援を目指した研究事業を推進することを目的に、こどもみらい館企画推進会議及び同会議研究・研修部会で検討、協議を重ねてきました。

保育内容の更なる充実・発展においては、第2期の「保幼小連携研究プロジェクト」が成果として掲げた「就学前と就学後の間に文化の段差はあるものの、それを乗り越えていく鍵となるのは、これまでの遊びを中心とした保育で培った子ども一人ひとりの『自信』『自己肯定感』『信頼感』であり、学校への『期待』と『憧れ』である」という考察から、保育園(所)保育士と幼稚園教諭が、乳幼児期における子どもの心の育ちについて探り、小学校教諭を交えて、その心の育ちをいかにつなげるかについて研究を進めていきたいと考えました。

子育て支援においては、「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」について共通理解ができましたが、このような到達点と「全職員の理解」「情報発信の具体的な方策」「家から出られない親子への支援」「地域のネットワークを拓く」などの今後の課題を踏まえ、子育て支援者としての意識のあり方について研究を進めていきたいと考えました。

これらを踏まえ、前述のものを「子どもの育ちの連続性研究プロジェクト」、後述のものを「子育て支援研究プロジェクト」とし、平成24年度に発足する運びとなりました。

第2 各研究プロジェクトの取組とまとめ

第2 各研究プロジェクトの取組とまとめ

【子どもの育ちの連続性研究プロジェクト】 P. 5 ～ 44

テーマ：子どもの心の育ちに目を向け 子どもの育ちをつなぐ
保育と保幼小連携を探る
～「自信」を育み、つなげる～

子どもの育ちに関するグループ

- 乳幼児期の自信とはどのようなものか
- どのように自信が子どもの心に存在していくのか
- そのためには保育者はどうかかわるのか

保幼小連携グループ

- 何を、どうつなげるのか

について

具体的な場面や実践をエピソードに描くことを通して考察してきました。

【子育て支援研究プロジェクト】 P. 45 ～ 82

テーマ：親子の育ちを支える子育て支援

何故、保育園(所)・幼稚園が子育て支援をしなければならないのか

- 子育て支援施設や関係機関見学・視察
- 保育園(所)・幼稚園における子育て支援の共通性と違いの検討
- 子育て支援に関するこどもみらい館共同機構研修の受講
- エピソード検討

から

今の保護者の抱えているしんどさを考え、支援者のあり方について

考察してきました。

【子どもの育ちの連続性研究プロジェクト】

I 研究主題と設定理由

1 研究主題

子どもの心の育ちに目を向け子どもの育ちをつなぐ保育と保幼小連携を探る

～ 「自信」を育み、つなげる ～

2 設定理由

(1) 第1期、第2期における成果と課題を引き継いで

ア 共同機構による研究プロジェクト

こどもみらい館では、乳幼児期の保育・幼児教育の資質向上を目指し、保育園(所)・幼稚園、私立・市立・国立の垣根を越えた「共同機構」として、研究・研修を進めてきました。研究においては、いくつかの研究プロジェクトを立ち上げてきましたが、その中の一つとして、民営保育園、市営保育所、私立幼稚園、市立幼稚園及び国立幼稚園の先生方が膝を交えて保育について語り合うことを大切にしたい研究を行ってきました。

イ 第1期

まず第1期として、「就学前教育研究プロジェクト」を、平成16年6月に立ち上げ、平成21年3月までの期間、研究を進めていきました。

保育園(所)と幼稚園の間には、保育・教育内容や指導方法の違いや同じ言葉を使っても意味するものが違うなど、様々な違いが見えてくる一方、子どもの中に育てたいと願っていることは同じであることが分かりました。

保育園(所)と幼稚園の違いと共通点についてより具体的に理解を深めていくこと、子どもたちが小学校との段差を乗り越えていくためには、小学校が乳幼児期の子どもの育ちを知ることが重要なことの一つであることなどが次への課題となりました。

ウ 第2期

第1期の課題を引き継ぎ、第2期には、「保幼小連携研究プロジェクト」を立ち上げました。保育園(所)、幼稚園及び小学校が子どもも先生もつながり、互いの保育・教育を知り合うことを目指し、同一校区にある保育園(所)、幼稚園及び小学校の2つのグループで研究を進めることとし、平成22年5月から平成24年3月までの期間取り組みました。

そこでは、保育園(所)、幼稚園及び小学校が互いの保育・教育内容や保育・指導方法の違いと共通点について、より具体的に理解を深められたことや、就学前の子どもたちにとって、子どもを見守る大人の連携と、小学校との交流を重ねることが子ども達の安心につながることなどの成果が見られました。

そして、就学前と就学後の間に文化の段差はあるものの、それを乗り越えていく鍵となるのは、これまでの遊びを中心とした保育で培った子ども一人ひとりの「自信」「自己肯定感」「信頼感」であり、学校への「期待」と「憧れ」であるのではないか、そこ

をしっかりと育むために、保育園(所)・幼稚園で私たち保育者はどのような保育を大切にしていける必要があるのかについて更に深めたいという思いが生まれました。

(2) 第3期研究プロジェクトへ

そこで、それを第3期の目的とし、更に心の育ちそのものは乳幼児期だけのものではなく、就学後もずっと続いていくという「育ちの連続性」にも着目し、「子どもの心の育ちを大切にした保幼小連携につなげる」ことも目的に加え、「子どもの心の育ちに目を向け子どもの育ちをつなぐ保育と保幼小連携を探る ～「自信」を育み、つなげる～」をテーマに研究を進めることとしました。

II 研究方法

研究を始めるにあたり、テーマの前半部分の「子どもの心の育ちに目を向け」については「子どもの育ちに関するグループ」、後半部分の「子どもの育ちをつなぐ」については「保幼小連携グループ」と、2つのグループ構成をとることとしました。

1 子どもの育ちに関するグループ

(1) 目的

就学前の子どもたちが小学校に憧れの気持ちを持ち、自信や自己肯定感を持って就学していくためには就学前施設において、何を大切にしていける必要があるのか、そのためには、私たち保育者はどのようにかかわっていくのか、子どもの心に目を向けて保育の質について探っていくこととしました。

(2) 方法

「自信」に焦点を当て、各自が自分の保育の中で「これが自信かな」「こんなときに自信がついたかな」という場面を探し、エピソードとして記述する。そのエピソードをグループメンバーで討議し、乳幼児期の自信とはどのようなものなのか、どのようにして子どもたちの心の中に存在していくのか、保育者はどのようにとらえかわるのか、保育現場における保育者と子どもの関係性を具体的に探っていくこととしました。

(3) メンバー

そのためには、保育園(所)・幼稚園、私立・公立、様々な園(所)の先生方が目の前の子どもたちの具体的な姿や自分の保育観などを出し合うことが重要だと考え、共同機構各参画団体から個人として研究メンバーを募りました。民営保育園1名、市営保育所2名、私立幼稚園2名、市立幼稚園2名の参加をいただき、スタートすることとなりました。

2 保幼小連携グループ

(1) 目的

就学前の子どもたちが小学校に憧れの気持ちを持ち、自信や自己肯定感を持って就学していくためには、何をどのようにつなげるのかについて、実践を通して検証していくこととしました。

(2) 方法

具体的には、保育園(所)、幼稚園及び小学校の交流とそれに伴う事前研、事後研、交流の姿からのエピソード討議を行い、保育園(所)と幼稚園の保育者と小学校教諭との心の育ちのとらえ方の相違、その上に立ったそれぞれが担う役割、そして心の育ちをつなげるとはどういうことなのかについて検証していくこととしました。

(3) メンバー

そのためには、同一小学校区にある保育園(所)、幼稚園及び小学校が施設単位で進めていくことが重要だと考え、民営のおいけあした保育園、市立中京もえぎ幼稚園及び市立高倉小学校と共に進めていくこととなりました。

3 合同

2つのグループはそれぞれの進捗状況を報告し合ったり、互いの討議の場や具体的な交流の場に参加したりしながら進めていきました。最後は、一同に集いそれぞれの成果と課題を出し合い、合同でエピソード討議をすることで、子どもたちの心に焦点を当て、保育の質の向上と就学前施設が保育の中で大切にしてきた子どもの育ちを小学校にどのようにつなげていくのかについて深めていくこととしました。

III 期間

平成24年10月～平成27年3月

IV アドバイザー

1 スーパーバイザー

- 鯨岡峻さん（京都大学名誉教授、中京大学客員教授）
- エピソード討議の内容はもちろんのこと、様々な取組内容の摘録をすべて読んでくださり、子どもの心の育ちや連続性について様々に御示唆を頂きました。

2 研究アドバイザー

- 大倉得史さん（京都大学大学院准教授）
- エピソードについて、書き方から教えてくださり、討議ではテーマに迫っていけるように具体的にアドバイスを頂きました。

V 取組概要

(A : 子どもの育ちに関するグループ, B : 保幼小連携グループ, ○ : 主グループ, ● : 自由に参加, ◎ : 合同)

1 平成24年度

グループ		年月日	会	内 容
A	B			
○		H.24 10/19(金)	第1回会合	メンバー顔合わせ
○		11/ 9(金)	第2回会合	研究の方向性と取組計画について討議
○		12/ 7(金)	第3回会合	研究の方向性と研究テーマについて討議
○		H.25 1/16(水)	第4回会合	研究テーマと研究内容について討議
○		2/ 4(月)	第5回会合	自信・自己肯定感・信頼感について討議 アドバイザー：大倉得史さん
○		3/13(水)	第6回会合	自信・自己肯定感について討議

2 平成25年度

グループ		年月日	会	内 容
A	B			
○		H.25 4/18(木)	第7回会合	研究テーマと取組計画について討議
○		5/ 2(木)	第8回会合	講義「京都市の保幼小連携の状況と課題について」と討議 講師：中西昌子さん (京都市教育委員会指導部学校指導課首席指導主事)
	○	6/11(火)	交流事前研	交流会のねらいについて討議 内容等についての打合せ
●	○	6/28(金)	交流	保幼小交流会 於：高倉小学校
●	○	6/28(金)	交流事後研	交流会のまとめ
○		7/17(水)	第9回会合	エピソード討議 (エピソード①②③) アドバイザー：大倉得史さん
●	○	8/29(木)	交流事後研	エピソード討議 (エピソード⑭) アドバイザー：大倉得史さん
○		9/ 4(水)	第10回会合	エピソード討議 (エピソード④⑤⑥⑦) アドバイザー：大倉得史さん
○	●	10/30(水)	第11回会合	高倉小学校1年生担任を交えての意見交換
○		11/25(月)	第12回会合	第11回会合の意見交換を受けての討議 鳴門教育大学附属幼稚園研究発表会報告 奈良市認定こども園視察報告

○	●	H.26 1/ 9(木)	第13回会合	これまでのまとめと課題について討議 中間報告会に向けて
◎		1/29(水)	中間報告会	
○		3/14(金)	第14回会合	中間報告会を受けて、次年度の方向性について 討議

3 平成26年度

グループ		年月日	会	内 容
A	B			
○		H.26 4/28(月)	第15回会合	年度の計画再考
●	○	5/19(月)	保幼小連絡会	高倉小学校1年生の授業参観 卒園保育園(所)・幼稚園と高倉小学校との協議
●	○	5/30(金)	交流事前研	交流会のねらいについて討議 内容等についての打合せ
●	●	6/16(月)	共同機構研修	講義「主体としての心を育てる保育」 講師：大倉得史さん
●	○	6/19(木)	交流	保幼小交流会 於：高倉小学校
●	○	6/20(金)	交流事後研	交流会のまとめ
○		6/27(金)	第16回会合	保幼小連絡会と共同機構研修講義内容を踏まえて、「乳幼児期における自信」と「小学校につながる」という視点について討議
○	●	7/16(水)	第17回会合	エピソード討議（エピソード⑧⑨） アドバイザー：大倉得史さん
○	●	8/ 1(金)	第18回会合	エピソード討議（エピソード⑩⑪） アドバイザー：大倉得史さん
○	●	9/19(金)	第19回会合	エピソード討議（エピソード⑫⑬） アドバイザー：大倉得史さん
◎		10/29(水)	第20回会合 交流事後研	エピソード討議（エピソード⑮⑯） アドバイザー：大倉得史さん
◎		11/17(月)	第21回会合	これまでの取組における気づきと学びについて討議
◎		H.27 1/ 9(金)	第22回会合	報告会に向けて
◎		1/26(月)	報告会	

VI 研究内容

1 子どもの育ちに関するグループ

(1) 最初のとらえ

「自信」とは、「何かができた」「達成した」などの経験からくる感情

この研究プロジェクトを始めるにあたり、最初に「どのように自信をとらえて保育をしているか」を確認しました。メンバーの意見は、「何かができた、達成したなどの経験からくる感情だ」ということでした。

(2) 第1回エピソード討議

- ① 運動会に向けた取組の中で竹馬に乗れるようになったA児
- ② 得意な帽子取りで自己発揮ができるようになっていったB児
- ③ お泊り保育に向けて前向きに取り組むC児

実際、1回目のエピソード討議に持ち寄ったエピソードは、「子どもが何かをできるようになった」「得意なことが思う存分できて、みんなから認められた」という場面を中心に書かれていました。それはある意味一つの自信の形ではあります。

しかし、以下3点のアドバイスを頂き、

- できるようになることにこだわると、「できる」「できない」で評価してしまう保育、褒めて頑張らせる保育に傾く危険性があるのではないだろうか。
- 頑張って取り組んではいるものの、なかなかできない子どもや、それこそずっとできない子どもには自信を育むことはできないのだろうか。
- 何かができて輝ける瞬間に自信が育まれるのであれば、保育者はそのような瞬間をつくるための援助をしていくことが大切になっているのだろうか。

それらを探るために、むしろ「できないとき」を見ていくことにしました。

(3) 第2回エピソード討議

「自信」とは、「何かができた」「達成した」などの経験からくる感情



むしろ「できないとき」「負の姿を見せているとき」を見てみよう

2回目のエピソード討議には「できないとき」「負の姿を見せているとき」の4つのエピソードが持ち寄られました。

- ④ 着替えの場でおしっこをしていたD児
- ⑤ プールに入るのが嫌なE児
- ⑥ クラスの中で自分の居場所を見つけられないF児
- ⑦ 負の事実を素直に言えないG児

この内、本冊子においては、④のエピソードとその討議内容と考察を取上げます。

エピソード④

幼稚園 H教諭

1 テーマのとらえ方

卒園を控えた子どもたちを見ると、年長組としての自覚を持ち、「自信」に満ち溢れた姿を見せる。それは幼稚園教育が目指している姿であり、また小学校から異動し、幼稚園教諭を経験して感じたことである。

「自信」に満ち溢れた姿とは、自分の思いを出すことができ、また友達の考えにも耳を傾け、時には折り合いをつけながら仲間と協同し、達成感や充実感を味わいながら生活したり遊んだりすることを楽しむことができる姿だととらえている。そして、その姿の背景にあるのは「安心感」であるということをおくことはできない。入園時の例をあげると、よくお母さんから離れられず泣いている姿が見られる。ずっと一緒にいた親から離れることの悲しさは当然あるが、知らない所で知らない人がたくさんいる中での戸惑いや不安は大きいものだろう。保育者は、泣いている子どもの姿を全面的に受け止めながらかかわっていく。次第に子どもはその保育者に身を寄せるようになり、そこを安心基地とし外へ目を向けようとする。そうした安心感の中で、子どもは自己を発揮するようになり、年長組には友達と協同して遊びを楽しむ姿が見られるようになる。

これは、小学校の入門期にも同じような姿が見られる。幼稚園で培った自信や自立は、新しい環境や新しい担任の先生の中で一旦は影を潜める。しかし、担任の先生への安心感や友達ができたことへの安心感を得て、ようやく自己発揮へと向かい、幼稚園で培った力を発揮することができるのだということを、これまでの幼小連携の取組の中で学んだ。

このように、「自信」というのは、「安心感」に包まれながら育まれるものであり、どの

年齢においても、その一番の根底にあるのは常に自分のことを受け止めてくれる身近な大人、保育者の存在があるのではないかと思います。

今年度は2年保育の4歳児の担任となり、子どものあるがままの姿を受け止め、子どもが安心して生活を送り、遊びに向かえる安心基地の存在になるように保育を進めていきたい。

2 エピソード記述 「あっ、ここも濡れてるわ、先生」

(1) 背景

Dは今年4月に入園した2年保育の4歳児の男児である。両親は発達に遅れがあるのではないかと心配し、未就園児（3歳児）から療育施設に通っている。入園前は未就園児クラスに週4日、本園にお母さんと一緒に通っていた。父・母・妹の4人家族で、父方祖父母が隣の家に住んでいる。放課後によくおじいちゃんと散歩に園の前を通ることがあり、見かけるとおじいちゃんは「ほら、挨拶せんか」とDの頭をはたいてうながし、Dは頭をぺこりとする。また、登園して上靴に履き替えることに時間がかかり、お母さんが「早くしなさい」とうながすと「嫌や、どっか行け」と言って反って違う行動をとろうとし、なかなか朝の準備が進まない。おじいちゃんは怖いから従い、お母さんの言葉には反発しようとしているように感じ、本人とおじいちゃん、お母さんとの関係が気になる。

語彙が少なく、遊んでいる様子を見ていると友達の言っている言葉をオウム返しに発していることが多い。また私や友達の言っていることの意味を理解しにくく、友達のしているのを真似しながら行動している。そのため、友達と思いが通じ合わないと、手を出したりつばを吐いたりしトラブルになる。私が間に入って話を聞こうとするが、その場を離れようとしたり、「うるさい、どっか行け」と言ったりし、なかなかコミュニケーションをとることが難しい。そんなことが度々あり、友達に手を出してしまうことに対して注意することが多くなり、私自身の力不足でなかなかDにとって私が自分を受け止めてくれる存在になっていないように感じていた。降園時には一人ひとりにハイタッチをしながらさよならをするのだが、Dだけはしようとせず、「嫌や」と手を後ろにしたり、回りこんで逃げようとしたりする行動をとった。Dの気持ちを受け止めた気持ちはあるが、なかなか思いを共感し合うことができない難しさを感じていた。Dは興味を持ったことに「これ何？」と聞いてきたり、好きな遊びに夢中になって遊んだりしている。私はそんなDと一緒に話をしたり遊んだりしながら、Dが私を安心できる存在として感じられるようにかかわってきた。

(2) エピソード

Dはトイレの自立ができておらず、家ではトイレが怖いと言って一度も行ったことがなく、おむつを履いてすごしているようだ。お母さんは、濡れて気持ち悪い感じに気付かせようとパンツを履かせたりおまるを用意したりと家でもトイレの自立に向けて頑張ってみたが成果が出ないと悩んでいた。幼稚園では、遊んでいる途中でいつの間にかパンツを濡らしている。活動の合間にトイレに行くことをうながすが、「出ない」と言

って行こうとしない。また濡らしたズボンは声をかけなければ着替えをしようとする。私は失敗したことを咎めるのではなく、受け止めながらやっていこうと思った。

ある日、弁当が終わって片づけているところにDがモゾモゾしていたので「おしっこかな」と思い「Dくん、トイレ行こうか」と声をかけ、手を握った。いつもは「嫌や」と言って手をふりほどくのにこの日はトイレと一緒にいくことができた。「トイレに行けた！これならできるかも！」と私は期待を膨らませ、ズボンとパンツを脱ぐのを見守った。「出るかなあ」と声をかけるが、じっと立ったままでなかなかおしっこが出ないというより出そうとしていないように思えた。「もしかしておしっこの出し方が分からないのではないか」と疑うほど一向に出そうとしない。「おしっこ出ないね」と声をかけると「おしっこ出ない」と答え、じっと立っている。私は初めてトイレに行けたことを受け止めたいと思い、「Dくん、トイレに行けたね。おしっこ出そうだったら、また一緒に行こう」と声をかけた。Dはうなずきながら、パンツとズボンを履き、園庭へ遊びに出た。10分ぐらい経って見てみると、やっぱりズボンを濡らしていた。「やっぱりおしっこはしたかったんやな」と思いつつ、「おしっこはしたかったけど、やっぱり出し方が分からないのか」と感じた。

別の日、友達と砂場遊びをしていたDがズボンを泥だらけにして帰ってき、友達と一緒に着替えに向かった。私はしばらくしてDの着替えているところへ向かった。すると、Dはかがんで下を見ながらおしっこをしていたのだ。Dは私の姿に気付くと驚いたように体をビクッとさせて表情をこわばらせた。私はそのとき、「あれ？Dはもしかして分かってやっていたのか？おしっこの仕方分かっているじゃないか」と感じ、疑いが晴れたことでとても安心した。それと同時に、体をビクッとさせ、あの表情を見たとき、日ごろおじいちゃんにきつく叱られて、頭をはたかれている姿が思い浮かんだ。Dは「また叱られる」と思ったのではないだろうか。私は「Dくん。おしっこできるやん。すごい、すごい。先生、安心したよ。いっぱい出たなあ」と言葉をかけた。私の言葉にDもびっくりしたのだろうか。目を丸くしてこちらをじっと見ている。私は「ここ、びしょびしょになったなあ。きれいにしような」と言って、すぐに消毒液とぞうきんを持ってきておしっこで濡れた廊下を拭いた。すると、「あっ、ここも濡れてるわ、先生」と飛び散ったおしっこを指差した。「・・・先生」って初めて聞いたと思ったが、その喜びには触れず、「ほんまやなあ」と私はDの指差したところを拭いた。「あっ、ここも濡れてるわ」とDはすっかり笑顔になり、Dは濡れているところを探し、私はそこを拭くということを繰り返して、一緒に床をきれいにした。『お母さん、おしっこの仕方分かったよ』って言ったらきっと喜ぶで」と声をかけると、Dはニコッと微笑みながらうなずいた。帰りにハイタッチもした！

(3) 考察

これまでDと友達とのトラブルが起こると、Dの気持ちを受け止めながら仲裁に入っていたつもりでも、Dにとっては叱られていると感じ取られていたのだろう。普段の生活の中でDと心を通わせられないだろうとかかわってきた中で、初めて私自身がDの

気持ちを受け止められたのではないかと感じたエピソードである。廊下におしっこをしていたDが私の存在に気付いて、体をビクッとさせ表情をこわばらせたときに、これまでのDと周りの大人とのかかわりが見えたように感じた。そしてもしかしたら、私も同じだったのではないかと感じもした。そのとき、「ここでおしっこしてはいけません」と言おうとする気持ちを押さえさせた。

また、一緒に廊下を拭いているときに、今までとは違うDと私のやりとりを感じた。いつもあまのじゃくなことをするDに、冗談っぽく追いかける私、そしてその私の対応を見て嬉しそうに逃げるようなやりとりではない。Dの気持ちを受け止められ、Dとの心が通じ合った感じだった。Dも、私を気持ちを受け止めてくれる存在として認め、「先生」と呼んだのかもしれない。

次の日お母さんから、幼稚園から帰って初めてトイレでおしっこをしたことを涙ながらに語ってくれた。なぜそうしようとしたのかは分からないが、その出来事があった日のことである。あの場面のやりとりがDの行動に変化をもたらせたのかもしれない。Dが幼稚園でトイレに行くようになったわけではない。しかしDと私との関係において、私のしていることを真似ようとしたり言葉をオウム返しで話したりするようになった。少しは私を安心できる存在と受け止めてくれていると思っている。私を安心基地として、友達とかかわり、自分の思いを出す中で友達の気持ちにも感じていけるように今後も見守っていきたい。

ア 討議内容

今回は、「できないとき」「負の姿を見せているとき」から「自信」について探っていくエピソードを書くということだったけれど、とても、難しかった。

D児と自分の気持ちがつながったと感じたエピソードなのだが、はたしてこれが「自信」のエピソードとなるのだろうかと迷っている。

「自信」の背景には、安心感やその子と周りの人たちとの温かい関係が必要で、それがあるからこそD児が「ぼくはぼくでいいんだ」と思えるようになるのだと思う。

私のことを思い起こすと、安心感がないと「自信」や「自己肯定感」は絶対生まれまいだろうと感じている。

私も、周りの人が支えてくれたり、「それでいいよ」「大丈夫」と言ってくれたりしたら、「これでいいんだ」と思え、自分を出せると思う。

反対に「お前はあかん」と言われたら、「もういい、私には無理や」と思ってしまう。

そこには、人と人との関係と安心感という雰囲気があるだろうと思う。



H教諭



メンバー

D児がお着替えの場所でおしっこをしているのを見て、「そんなとこでしたらあかんやん」と言わずに、「すごいな、おしっこできるんや、いっぱいだな」と認める声をかけたのがすごいと思った。

本当におしっこの仕方を知らないだろうと思っていたので驚いた。それと同時に、私は何にも言ってないのに、D児が「やべー叱られる」という表情をしたので、ここは叱る場面ではないなとも思った。D児はあまのじゃくで、言葉が通じ合わないところもあって、日頃どうしても注意することが多くなっていた。相手を傷つけるようなことは伝えていかなければならないが、「また叱られた」という思いを持っていないかな？違うところで良い関係を築けないかな？と悩んでいたときに起こった出来事だった。



メンバー

わざと悪いことをしたり、人をたたいてしまったりしたときには、いつもそのような表情をするの？

そんな顔はしない。
いつもは、自分が近づくと「あ、きたな」「おまえどっかいけ」と反発して、身構えていた。



アドバイザー

この場面はある意味無防備だったのかも。
たぶんD児にとって、おしっこはパンツの中で人知れずするものであり、人目のないところでこっそりしていたのに、見られてびっくりしたのかもしれないね。



このエピソード以降、「あっちいけ」ということは？

今でもトラブルが多くて、人をたたいたりしたことについては話をするので「あっちいけ」という言葉はまだ言うかな。
ハイタッチはしてくれるようになったなあ。
それと、「先生」とは呼んでくれる。
先生と認められたのかな。



「あっちいけ」の種類が前とは違うんじゃないかな。

エピソードの前のときは、「本当にあっちいけと思ってるんだろうな」「自分のことを嫌いなんだろうな」と感じていた。
自分の受け止め方だけかもしれないけれど、エピソードの後には、自分自身がD児が言っていることをすんなりと受け取れたり、流せるようになったりしたように思う。
D児自身も優しく言ってくれているのかもしれないな。



家ではこの日におしっこができ、それからはトイレでしている。
でも、幼稚園ではあいかわらず・・・。
それがおもしろい。



次の日母親が泣きながら喜んで「早く先生に知らせたい」と来られた。
家に帰っておむつに着替えるというのが日常だったようだが、その日は「いらん」と言い、「どうしたの、トイレに行きたいの?」という母親の問いかけに、「自分で行くの」とトイレに行きたらしい。
あまりにもつながりすぎていてすごいなと思ったのだが、幼稚園では全然しない。



H先生が「お母さん、おしっこの仕方分かったよって言ったらきっと喜ぶで」と言った言葉が、D児にとって印象的で、嬉しかったんじゃないかな。
だから、母親が喜ぶ家でしているとかな。



いきなり全部トイレでできるようになったのでは、本人はしんどいかも。
幼稚園では今までどおりというのが、バランスがとれているのかもしれないね。



背景のところで祖父や母親との関係が気になると書かれているけど、D児にとって母親が喜ぶことが本当に嬉しかったのかな？
してはいけない場所でおしっこをしたら、家では怒られるけど、幼稚園では怒られずに受け入れられている。
受け入れてもらったという居心地の良さから、幼稚園では甘えてしないということも考えられるのでは？





家の方が頑張るところになっているということかな。
母親や家庭の関係でまだよく見えないところはあるけれど、どのようにされていても子どもは母親が好きだし、母親への気持ちは強いんじゃないかな。
一方では母親が厳しいから従っているというところもあるかもしれないけれど、もう一方で母親が嬉しいと自分も嬉しいという気持ちがありそうな感じがする。



保育所でも、新入の子どもの中には、慣れないと一回もおしっこに行かない子どもがいるよ。
安心できたらトイレに行けるようになる。
排泄は出し方が分からないのではなく、安心しないと出ないものなんじゃないかな。
安心感につながっていく大きな問題なのだろうと思う。

それにしても、このエピソードって「自信」について書いてるって言うていいのかな？
どうしても「自信」は、何かがたくさんできたり、失敗が少なかったりととらえてしまう。
「自信」を「自己肯定感」に置き換えるとすんなりいくんだ。
「自信」と「自己肯定感」の違いを考えると、やはり「自信」は「できるという自信」ととらえてしまうんだけど・・・。



「先生が自分のことを認めてくれた」「分かってくれた」ということが、自信なんじゃないかな。
「先生がトイレのことでも分かってくれた」「こういう場所でもおしっこが出ることをまず優先してくれた」ということが、D児にとっては自信につながっていくのではないかな。
だから「自信」というテーマでいいと思うよ。

「信頼感」「安心感」ともどう違うんだろう？





日常大人が使う「自信」は、「何かができる」「そんな能力があつてすごい」という「自信」を指すけれど、乳幼児期は「安心感」も「信頼感」も「自信」も「自己肯定感」も分化してなくて、全部一緒。



例えば、今、自分が発言したときに、「変なこと思ってる人」だと思われたら、自信がなくなって言えなくなってしまうけれど、この場での議論ではそうとらえられないだろうという安心感やメンバーへの信頼感があることで、何を言っても大丈夫だろうと思える。
D児にとってもこの失敗の中で、「先生なら受け止めてくれる」と思えたことが、安心感であり信頼感であり自信なのかなと感じた。

D児には安心感を持って欲しいと思っていた。
自分がD児を認めたことで「先生、ぼくのこと分かってくれたな」と感じてくれたと思うんだけど、それが今後、様々な場面や友達関係の中でD児がどう変わっていくのかを見ていきたい。
そこから「自信」ができてくるのだろうか。
まだまず一步をやっと踏み出したという感じなのかな。



このエピソード自体にも、ハイタッチができるような自信とおしっこができる自信がすでに出てきているよ。

おしっこができたということを書きたかったのではなくて、D児と気持ちがつながったことが書きたかったんだけど・・・。



実際そういった気持ちのつながりがおしっこをする場面につながっていているのがよく見えるよね。
おもしろいのは、幼稚園ではなく、家でそういった場面が出てきていること。
「できる」「できない」だけの場面で見ると、家の方が教育力があることになる。
でも、一番本当に大切な何かが起こっているのは、むしろこういったエピソードの中！

イ 考察

- 乳幼児期には、「何かができるという自信」の前に、「より根本的な自信」が大切なのではないだろうか。それは、「ありのままの自分でいいんだと思える安心感」です。
- それらは他者との関係性の中で育まれてくるものであり、「何かをした」「何かができた」ではなく、例えば、「その子どもと保育者の気持ちを通じ合った」「保育者との関係の中で安心して過ごせるようになった」などではないだろうか。
- そのためには、子どもが「負の姿」を見せたときに保育者がどう受け止めていくかが非常に重要だということが分かりました。
- 今回のエピソードは、まさに「自信」の発生現場でした。しかし、メンバーはこれらのエピソードを書いてくるにあたって、「これが本当に自信について書かれたエピソードなのだろうか」と半信半疑で持ってきています。
- それは、「根本的な自信」が「できる」「できない」の場面にどう生きてくるかというつながりや、根底に培われたものが今後どう発展していくのか、子どもの心の育ちがここからどのように進んでいくのかという見通しが持ちにくく、「これが自信なのか」「これが本当に自信につながるのか」と疑問になっているからではないだろうか。
- 第3回以降は、第2回で取り上げた子どもの心が今後どう育っていくのか、発展していくのかを丁寧に見ていくこととする。

(4) 中間報告会における大倉得史研究アドバイザーからの講評

- 乳幼児期における根本的自信のとらえの重要性。
- 子どもにどのような感覚を育むことが本当の意味での自信となるのか。
- 子どもの体験世界に添った言葉で、保育者が言語化・明示化する。

第3期のテーマは、保育の場と学校教育の場の文化差を見据えつつ、そこを乗り越える鍵となる自信や自己肯定感を育む保育とはいかなるものかを考えていくということになった。確かに「何にでも興味を持ち、積極的に取り組めるような自信のある子」や「少々の失敗や困難ではくじけないような自己肯定感のある子」は、多くの保育者・教育者が望む一種理想的な子どもの姿であろうし、そうした子ならばスムーズに学校教育になじんでいくことができるはずという見方もあながち間違っていない。ただし、自信や自己肯定感を育むことを目指す際には、次の2点に十分注意する必要がある。

第一に、自信や自己肯定感を育むというと、しばしば人は「子どもに『〇〇ができた』という成功体験や達成感を味わわせる」とか、「小さなことでも褒めて、子どもをその気にさせ、頑張る力を身に付けさせる」といった短絡的な発想に陥りがちだということである。確かにそうした「〇〇ができる」という自信は、大人の世界では自信の一側面ではあるが、乳幼児期にはそれ以前のもっと根本的な自信を育てなければならない。根本的な自信とは、「何かができるができてまいが、自分は他者から認められる存在、愛される存在だ」とか「何かできて嬉しいときにも、できなくて悲しいときにも、何もやりたくないときにも、他者は自分の気持ちを分かってくれる」といった、自分や他者への無条件の信頼の感覚（基本的信頼感）である。この根本的な自信の裏付けがないままに、「〇〇ができたから認めてあげる」「頑張ったら褒めてあげる」というかかわりを積み重ねてしまうと、子どもの中には「〇〇ができない子どもは価値がないんだ」「頑張らないと褒められないんだ」といった感覚が根付いてしまう。そうならないためにも、子どもが何かをできたとき以上にむしろできないときに、頑張れたとき以上に頑張れないとき、やる気がおきないときに、保育者がどう子どもの気持ちを受け止めていくかということを、しっかり考えていく必要がある。

ここまでの「子どもの育ちに関するグループ」は、自信とは何かを徹底的に考えてくる中で、保育の場で育むべき自信とは、「〇〇ができた」という自信ではなく、自分という存在や他者への信頼感、この世界が安心できる場所であって魅力的な瑞々しさに満ちているといった感覚の未分化な混合体であるということを見出しつつある。この点は、とても大きな前進であったと言える。

H先生のエピソードでは、廊下でおしっこをしてしまった子どもに対して、「えっ！なにやってんの？！」と否定的にかかわるのではなく、「おしっこの仕方分かってたんや」とむしろ喜んで対応している。どうしてH先生はそのような対応ができたのだろうか。それは、子どもの気持ちに寄り添っているからである。前段階でトイレに一緒に行ったとき、子どもの出したくても出せない気持ちや、もしかしたら本当におしっこの出し方を知らずに困っているのではないかということへの想像があった。それがあつたことで、現場を見たとき

に、子どもの目線に立ったところから言葉が出てくる。「これをしてはいけない」「これはいいことだ」ということを超えて、子どもの気持ちに寄り添ってみると、保育者側からすると「まずいよ」と思うようなことでも、子どもの側にはそれなりの気持ちの動きがあってそうしているんだということを感じることができる。保育者が持っている枠組みをいい意味で突き崩していくことが必要であろう。もちろん廊下でおしっこをすることについては困ったことであり、後に一緒に拭くことになる。しかし、まずは子どもの気持ちを受け止めて、それから保育者の願いを返していくことが大切なのである。

第二に、自信や自己肯定感という言葉は、しばしば第三者がある人を評価する際に用いられる言葉であるということにも注意しなければならない。例えば、「あの人は自分に自信がある、自己肯定感がある」という言い方はするが、「私は自分に自信がある、自己肯定感がある」という言い方はあまりしない。一人称で使われるときには、せいぜい「私は〇〇ができる自信がある」程度の使い方であり、それが上述のような自信を「〇〇ができる自信」ととらえる傾向にもつながっていると言える。つまり、保育の場において自信や自己肯定感を育むことを目指すのは良いにしても、それが子どもの体験世界におけるどのような感覚のことを指すのかを、しっかり吟味しておく必要があるということである。子どもの体験世界において、自信は必ずしも「〇〇ができるだろう」という感覚のことを指すのではないし、自己肯定感とは「自分で自分のことを肯定している」という感覚を指すものではない。では、一体どのような感覚を育むことが、本当の意味での自信や自己肯定感だと言えるのか。

例えば、H先生がこのエピソードを書かれたときに、最初に言われたことは「これは自信のエピソードなんですか？」であった。「素敵なエピソードですね」と絶賛するのだが、「一応書いてみましたが、これでいいのかわからない」ということだった。それは、子どもの中にどういった感覚が根付くことが自信であるのか、まだはっきりしていなかったからであろう。子どもの世界では、自分が自分のことを肯定したり信頼したりしているという感覚はない。だが、今回一つのヒントが出ていた。それは、人との関係性のあり方が、フワッと広がること、膨らむこと、温かく安心感に満ちたものになること、これが一つの自信の姿であるということである。初めて「先生」という言葉が出て、それまで保育者から逃げ回るように避けていたD児が、ハイタッチまでしてきた。これは、それまでのD児の体験世界からするとものすごい変化である。園の中ではあいかわらずおしっこはできず、行動パターンが変わったり、何かができるようになったりしたわけではない。けれども、D児の体験世界はあそこでグワッと広がっている。その感覚は、「安心感」でも「先生とよりフレンドリーになった」でも良いだろう。このように、子どものどのような感覚が「自己肯定感」や「自信」として根付いてきているのかを明らかにし、きちんと言葉にしていく必要がある。「子どもの育ちに関するグループ」でここまで取り上げられたいくつかのエピソードにもヒントがあるが、今後、子どもの体験世界に添った言葉で保育者が目指すべきものを言語化・明示化していくことが重要だろう。このグループの認識はそれらに近づいてきていると感じている。

(5) 第3～5回エピソード討議

「根本的な自信」がどう発展していくのか見てみよう

第3回から5回までのエピソード討議では、負の姿を見せている子どもが、根本的な自信の上に、どのような姿を見せてくれるのかに焦点を当てて、エピソードを持ち寄りました。

- ⑧ プールに入りたがらないI児
- ⑨ リレーで抜かされて泣いていたJ児
- ⑩ おにぎり作りに向かおうとしないK児
- ⑪ 友達と物の取り合いになったことから混乱したL児
- ⑫ 帽子取りで帽子を取られて怒ってしまうM児
- ⑬ いろいろなことができずメンタル面にも不安があるN児

この内、本冊子においては、⑬のエピソードの討議内容と考察を取上げます。

エピソード⑬

幼稚園 ○教諭

1 テーマのとらえ方

これまでの研究の中で、保育が営まれる現場において育まれるべき乳幼児の「自信」とは、何かができたと目に見えた行動の変化や結果に目がいきがちであるが、大切なのは身近な人（親、保育者、友達・・・）との信頼関係の上で育まれる、温かい関係性、ありのままの自分でいいんだという心理的安定が、子どもの自己肯定感を育み自信につながるのだと再確認した。

自信について根本的な子どもの育ちの土台に目を向け、子どもの育ちをつなぐという点を改めて意識して、家庭生活と園生活での子どもの姿に目を向け、個々が抱える背景や育ちすべてを受け止め、一人ひとりが安心して過ごしていける様々な環境を保証すること、そこに保育者としての役割があるのだと思う。乳幼児期に自分という存在そのものの価値を肯定できる経験の積み重ねが自己を育み、就学に向けての力につながるのだと思われる。

2 エピソード記述 「Nくんも・・・」

(1) 背景

N児は、父、母、兄（1年生）との4人家族で、3年保育の3歳児である。N児は1歳3カ月のときに急性脳症で一時的に歩行が困難になり、脳全体が炎症を起こしていたため現在も定期的に発達面を中心に診察を受けている。入園時の母親の話によると現在の様子としては医師から運動や言語など発達面において大きな問題は見られないが小学校に入るまでは気にかかるようにと言われているとのことである。

園生活が始まり、実際にN児と接してみると、靴が脱げない、履けない、水筒が下ろせない、リュックの荷物を出せない、違う視点で見るとできないという感覚ではなくやったことがない、自分で何かしようとする意思を感じないように思えた。また、遊びにおいてもブロックをつなげない、パスがしっかり持てない、遊具の上り下りができない、やりたいことはあるが人がいると立ったまま動かず視線で助けを求めている、何か周りから声をかけられたり、指示的な言葉をかけられたりすると泣くなど、これまでの生活経験の少なさや遊びにおける運動経験の少なさ、メンタル面の弱さ、大きな不安を抱えているように見えるなど様々な姿が見られた。同時に、経験の少なさからだけでなく手や指の使い方、脚力をはじめとして体の筋力の弱さなど発達面で気になる点も多く見られ、両面の姿を視野に入れながらサポートしていくことの必要性を感じた。

幼稚園には1年生になった兄も通っていたので、保護者は園に対しての理解や信頼は持っておられる。4月の面談時では母親の思いとして、脳症になったときの絶望的な心境を涙ながらに話され、とにかく怪我をしないように、どんな場所もどんな時も一緒にすごし守ってきたが、幼稚園ではどうしているのか心配だということや、何もできなくても元気で過ごしてくれたらという思いのかたわら、できないことに対してきつく当たってしまうという親としての複雑な心境が語られた。園での姿を言葉を選びながらありのまま伝え、直接家庭においてかかわる母親の思いやN児に対する接し方についても一つひとつ受け止め、幼稚園に入園させることができた母親の思い(決断)を認め精一杯サポートしていくこと、そして共にN児の成長を支えていこうと、母親の心理的サポートも視野に入れ新学期をスタートさせた。

(2) エピソード

N児はたくさんの不安を抱えながらも園生活を楽しみに嫌がることなく登園している。4月は担任の姿を求め常に一緒にいることを求めている。会話は主にお兄ちゃんの話、自分の興味のあることなど流暢ではないが話すことはできる。N児の家庭での姿を考慮し、またN児の不安を全面的に受け止める姿勢で接することを心がけ、登園時には一つひとつの行動を言語化しながら一緒に靴を脱ぎ(脱がせる)、一緒に朝の準備を行い、一人でできるようにの方向ではなく極端に言えばすべて教師が行ってもいいという気持ちで毎日を過ごした。遊びにおいてもクラスの他の子どもたちが滑り台に上り滑ってくる姿と一緒に眺め担任である私はその姿を実況中継しながら、N児がどのように感じているのか表情の変化を見ながら楽しげな雰囲気を伝えることを続けた。

5月の連休明け、N児が登園し靴と一緒に脱ごうとしたときに、隣で靴を脱ごうとした子どもがこけた。横にいた私はその子の援助をと思い、N児に対しては少しの間座って待っていてもらおうという思いも持ちつつであったが「ちょっと待ってて」とは言わずに、「靴脱いで待ってて」と言葉がけ、その場面を大きくとらえずごく自然に対応した。すると、私がこけた子どもの対応をしている横で一所懸命に靴を脱いで靴箱に入れて待っていた。その姿を見て私は喜びと驚きでいっぱい思わず「一人でできたね」と声をかけたくなったが、ここはひとまずこらえて、「お待たせ」と声をかけ保育室に向

かった。保育室に行く足どりが何となく軽く感じた。保育室に行くと、自然に自分でリュックのチャックを開け荷物を取り出し始めたので、当たり前のように接してきた対応を変えて、N児を横目で見ながら、横で準備している子に対してN児も意識できるようにと声をかけた。そして、準備を終え一緒に遊びに出た。

この姿を見るともしかしたら、これまでも自分でやろうとする気持ちはあったが担任の私が当たり前のように接していたのでやり出すタイミングがなかったのか、何かプッシュしていたら変わっていたのかな・・・とも思った。

いつもと同じように滑り台で遊ぶ友達を見ていたがその日は、楽しげに滑り下りる友達を見ながら満面の笑みを浮かべて見ていた。思わず、「N君も一緒に滑ろう！」と声をかけた。すると、ふっと真顔に戻り首を横に振った。やはり、プッシュはちょっと早かったかな～と思ひ声かけのタイミングも間違えたかなと反省しつつも、自ら行動できる日は近いかな～という手応えは感じた。

現に、次の日からは自分で靴を脱いで、朝の準備を自分でするようになった。母親にもこれまでの姿を伝えると、とても喜び、やはり涙し、家で父親に話すと父親も涙して喜んでいたという。改めて、わが子に対する思いを感じさせられた。そして、焦らずにいこうと思った。

5月の終わりのある日、準備を終えたN児が初めて「一緒に遊ぼう」と私に言った。今まで一緒に園庭に出て一緒に友達の姿を見ていたが、もしかしたら今日はやってみたいという気持ちが生まれているのかなと思った。そう思いながらも前回のことがあったのでまずは様子を見ようと思った。でも、自らの意思を出したことに、担任との信頼関係や園生活に対する自分の力を実感できているのではと感じた。園庭に出ると、最初に滑り台のところに行き、いつものように私と一緒に友達の姿を見ていた。すると、二人の子どもが連結して一緒に滑るのを見て、「Nくんも！」と言った。私は、「一緒に滑ろうか！」と言うと自ら体を動かした。初めての階段が恐怖心でいっぱいにならないように手とり足とり対で援助し上に上がることを心がけた。まずは、階上の景色を眺め自分の足で立っていることが実感できるように時間をとった。そして、「一緒に滑ろう」と声をかけ、N児を膝に乗せた。体からは恐怖心は伝わらず期待感の方が大きいように表情からうかがえた。「3・2・1・出発」とスピードを調整しながら滑り終えるやいなや「もう一回！」と言った。その日は、数えられないくらい一緒に滑った。

そして、次の日初めて、「Nくん、一人で滑れる」と言っ、上まで上がり、必死に腕に力を入れて体を支えながらゆっくり滑る姿が見られた。その表情から、恐怖心というより満足感のようなものでいっぱい、後に聞いた話だが、家に帰ると開口一番に「一人で滑り台した」と母親に話したそう。

このころから、何か新しいことに挑戦しようとする姿が見られるようになり、皆と一緒に何かしたいときは必ず「Nくんも」と言っ、一人で行動しようとする姿が見られるようになり、一番大きな成長は、こけたり失敗してもくじけず起き上がり再挑戦したり、自分では難しいことに対しては「手伝ってください」と言ったりするようになった。

ことである。家庭においても時間はかかるが「Nくんがする」「手伝わんといて」と必死に自分でしようとする姿が見られ、母親もやってあげるのではなくその姿を成長ととらえ見守られるようになったそうである。7月の面談では、自立をサポートする対応へと視点が変わってきたと話を聞くことができた。

(3) 考察

N児はお兄ちゃんが登園していたころより幼稚園には足を運び遊んでいたこともあり、一人で登園する不安はあるものの園生活に対する不安は少なく楽しいところだという思いは描いていたと思う。その点が、嫌がることなく登園できたことにつながっていたのではと思われる。

担任としては、入園後もその気持ちを頼りに、そして大切に、「できるように」援助するのではなく全面的に受け止めること、それに対していつまでとはなしに子どもが自ら行動しようとする姿が見られるまでとことん付き合おうとしたことがN児にとっては良かったのではないかと思われる。私自身、そう思っただけでかかわることで、気持ちにゆとりを持ち接することができたように思われる。

連結して滑る友だちの姿に「Nくんも」といった背景には、一人でなく誰かと滑ることができるんだ、という安心感が視覚的に得られたこと、そしてN児は進んで電車の話はしないが持ち物から電車は好きな方であると思われたので、興味とこれまでに芽生えてきた「やってみよう」という気持ちとがつながった瞬間だったのかなと思った。

改めて、「自信とは」を考えたときに何かができることがすべてではなく、周りの人たちとの信頼関係の上に自分という存在が認められ、居場所があり、生活が楽しいと自ら感じられることにより得られる心の持ちようなのではないかと思う。これからも、保育をしていく中で個々の様子を見ながらではあるが、大人側の視点より全面的に受け止めるということが何かを意識して取り組んでいきたいと実感した。

ア 討議内容



メンバー

保育者として、何でもやってあげている状態は葛藤があったでしょ？

とにかく全面的に受け入れ、どこまで待てるかやってみようと思った。



〇教諭



メンバー

経験の少ないN児に「いろいろな経験を積ませる」とか「いろいろな筋肉を使わせる」ではなく、全面的に受け止めていったのね。



「一人でできたね」と言いたいところを、「おまたせ」なのはなぜ？



「できた」と声をかけると、できることがいいんだという気持ちが芽生えてしまうかなと。
常にそうはしたくないと心に留めていたからかな。



アドバイザー

「できた」という行動評価ではなく、待っていてくれた気持ちに「おまたせ」と声をかけているのがいいね。



「保育室に行く足取りが何となく軽く感じた」というのは？



それまでは、おっちらおっちらという感じで歩いていただけで、そのときは、すすすっと動いたの。
私がそう思っただけかもしれないけれど。



ここで進んでいるね。



だからかわりを少し変えてみようと思った。



そこを感じられたのが素敵ね。



それまで変わっていくことを願って、丁寧にN児を見てきたからこそ、小さな変化を感じることができたんだと思うよ。



N児にはとことん待ってやろうと思った。
自分から動き出そうという気持ちがなければ、どんな声をかけてもダメかなって。
でもきっといつか動き出すタイミングがある。
それが1年先かもしれないけど、きっとあるはず！



N児の中にO先生と幼稚園という場に安心感や信頼感が生まれて、そこから自然と「自分もあれをやってみたい」という気持ちが生まれていったみたい。



「子どもを信じて待つ」ってここなのかも。
きっと変わっていくと信じられたから、待てたのだろうな。



これがなかなか難しい。自分が担任している
間に変わって欲しいと焦ってしまう。
一生涯のうちに変れたらいいのにね。

最初の出会いで躓いたら、それを克服するのに長い時間がかかるかなと。



N児は1歳3ヶ月のときに、すでに躓いてるよ。
この頃は「自分で体を動かせるんだ」という感覚が芽生える頃。
子どもが自らやってみようという意欲が出てくるとき。
そんなときに脳症になって、自分でやろうという意欲が一時的に
押さえられてしまったんだね。
だから何でもやってもらうのを待つ。
医学的に言語や運動面では大きな異常はないという所見らしい
けど、心は1歳のところで止っている。
だからこうした姿になっているんじゃないかな。



「私は私」の心の芽が早い時期に摘まれてしまったのね。
そこからの育ち直しが必要なんだ。



そして、「手伝ってください」と言うようになっているのは？

自分一人でやろうとするようになったところから、自分にとって難
しいことには「手伝ってください」と言うようになったの。





そこが面白いね。

ありのままの自分を受け止めてもらえるという「私は私」の心が芽生え、それが他者に対して「手伝ってください」とお願いするような新たな「私は私たち」の形態につながっていく。主体としての心はそんなふうに育っていく、複雑に展開していくことがよく分かるエピソードだね。



この数年、できないことや分からないことを言えることを大切に保育してきた。

自分のしんどい部分を言ってもいいんだという雰囲気クラスの中に作れるように心がけてきたの。

この研究プロジェクトに参加して、更に意識して過ごすようになったかな。



私は、この研究プロジェクトに参加して、「受け止めて返す」ことを心がけて保育をするようになった。

でも、自分のエピソードを読み返してみると、「あなたの気持ちを受け止めたよ。だからやってみようよ」だったのかなと……。それは違うんだと思った。



保育者の返しが「できるようになり」ではないよね。

子ども自身がどんどんとやってみようという気持ちになってる！

「返す」って言うのは、「こうなりなさいね」という直接的なことではなくて、子ども自身が動き出したくなるような働きかけなんだね。



そうそう。

自分のエピソードで言えば、帽子取りで帽子を取られたM児に、「悔しかったね」と気持ちを受け止めた後に、『さあ、あなたの気持ちは受け止めたよ、だから気持ちを切り替えて部屋に帰ってきなさい』という気持ちでかかわって失敗してるみたい。

その後の、「お弁当に卵焼き入ってるかな〜？」の方がM児自身が気持ちを切り替えられる声かけだったんだね。

エピソードを書くに当たって、「自信とは何か」を考えたとき、幼稚園が安心できる場となれば、子どもは自ら動き出すのではないかと思ったからなの。

保育者が引っ張り上げたり、後ろから押したりするのではなくて、「そのままどうぞ」というやり方もありなのではないかなって考えた。



N児でなければ「やりや」って声をかけていた？

子どもによるかな。

保育者は一人ひとりの子どもがどんな背景で育ってきていて、どんな性格をしていて、押したり引いたりしたときにはどうなるのかを見る力が必要なんだと思うの。

その子にとってより良いと思う方法でかかわっていききたいな。うまくいかないときもあると思う。

でもそれを踏まえて次のかわりを変えていけばいい。正解はないと思うから。



そして、「ちょっと声をかけるのが早すぎたかな～」という反省もあるように、あるがままを受け止めながらも、他の子の滑り台をしている姿を楽しげに実況中継したり、「一緒に滑ろう」と誘いかけたりしてる。受け止めて返す中に、「養護的な働き」と「教育的な働き」のバランスを繊細に意識した保育だと思うよ。

そして、このエピソードは、「滑り台を滑れたことが自信になりました。そして様々なことが自分でできるようになりました」ではない！



きっと、最初の段階だと皆そうとらえていただろうね。

でも、今回のエピソードの中身も討議内容も、「保育者との信頼関係や他の子どもとの関係の中で安心感が芽生え、『このようになってみたい』という思いができていた、そうしたことが全体が自信だ」「滑り台の一件はN児の心が育ってきた中での一つの出来事だ」というとらえになっているね。

「乳幼児期に育まなければならない自信ってこれなんだ」とメンバーの中の気持ちがそろったみたいだね。

イ 考察

- 「一人でできたね」ではなく「おまたせ」と声をかけている。「できた」と声をかけると、できることがいいんだという気持ちが芽生えてしまう。行動評価ではなく気持ちに応えることを大切にされている。
- 保育者がとことん受け止めたことで、N児に安心感が芽生え、自分から「やってみよう」と動き出した。ありのままの自分を受け止めてもらえるという「私は私」の心が芽生えると、自分でできそうなことを自分でしてみようと思ったり、自分には難しいことは「手伝ってください」とお願いしてもいいんだと思えたりする、新たな「私は私たち」につながっていった。
- 自分の負の部分を見せてもいいよと思えるために、子どもと保育者との関係とクラスの雰囲気作りを大切にしてきた。
- 受け止めて返すは、受け止めたから、さあやりなさいではなく、子ども自身が気持ちを向けられるような返し方が大事。
- 保育者の思いに引っ張り上げたり、押し上げたりするのではなく、子ども自身が動き出そうと思えるかかわりを大切にし、信じて待つ。
- しかし、ただ待つだけではなく、その子にとってより良いと思う方法でかかわり、常に子どもの姿から保育者のかかわりを見直していくことが大切。
- このエピソードは「滑り台を滑れたことが自信になりました。そして様々なことが自分でできるようになりました」ではなく、「滑り台の一件はN児の心が育ってきた中での一つの出来事だ」ということである。
- 「保育者との信頼関係や他の子どもとの関係の中で安心感が芽生え、『このようになってみたい』という思いができていた」そうしたことが全体が自信である。

2 保幼小連携グループ

(1) 1年次・2年次

これまでの取組を丁寧に見直す

まずは、研究プロジェクトに参加するまでも実施していた交流会を丁寧に見ていくことにしました。保育園・幼稚園の5歳児が小学校に出かけ、4年生とペアを組んで一緒に遊び、校内探検をする交流会です。

事前研では、どちらかがお客さんになるような交流ではなく、それぞれのねらいを確認して計画を進めました。

事後研では、交流会に向かう子どもの姿、当日の姿、後日の姿から、交流会の成果を出し合いました。

そして、日を改めて、幼稚園教諭が交流会当日の園児の様子をエピソードとしておこし、保育園・幼稚園・小学校の先生方が一緒になって討議しました。

14 小学生の心に添ったかわりから自分の思いを言葉にできたP児

小学校教諭からは、保育園・幼稚園の先生方が交流において一人ひとりに丁寧にねらいをもち、見取りをしている。この視点は小学校の教員に足りていないところだ。活動がうまくいったかどうかの視点で見えてしまいがちであるが、活動の意義や個々の子どもの心の育ちの見取りなど、これを機に総合の学習につなげていきたいと思うという意見でした。

保育園・幼稚園からは、園児たちは、事前の招待状を受け取ったこと、当日の交流、事後のお礼の手紙をかいしたことなどを通して、小学生に温かく受け止めてもらい安心感を持てたこと、小学生と気持ちがつながり小学校に憧れと期待を持つことにつながったという意見でした。

しかし、アドバイザーからは全般でとらえるのではなく、一人ひとりについて深く見ていく重要性を教えてもらいました。中間報告会においてより具体的に講評をいただいたので、そちらを表記します。

(2) 中間報告会における大倉得史研究アドバイザーからの講評

- 園児全般にとって、交流会が小学校への安心感、憧れや期待につながることは、おおよそ分かっていることである。一人ひとりの子どもたちにとってどのような意味があるのか、保・幼・小それぞれがもっと深いところで明らかにする。
- 心のありようを把握することは、養育・保育・教育に通底する「育てる」営みの基本である。保育と学校教育の場の文化差を尊重しつつ、それが子どもの心の育ちをどういった形で支えていくための「差」であるかを探る。

おいけあした保育園・中京もえぎ幼稚園・高倉小学校が1つのグループとなって、保育園・幼稚園の5歳児と小学4年生とで「いっしょにあそぼう会」という交流保育・授業を実施し、事前研、事後研、当日の子どもの様子についてのエピソード検討会などを行ってきた。ここ数年の取組について、全体として見れば、やや緊張しつつもワクワクして出かけていく園児、戸惑いしつつも親切なお兄さんお姉さんぶりを発揮する小学校児童の交流会として成功しており、子どもたちに日頃とは違った経験をしてもらう貴重な機会となっていることがうかがえる。

ただし、それが子どもたちの心の育ちにとってどのような意味を持っているのか、保幼小にかけての連続した心の育ちを支えていくために、この交流会がどのような機能を持っているのかについての分析は、これからの検討課題であろう。そのような分析を行うためには、やはりエピソード検討会をさらに充実させていくことが必要である。

エピソード検討会にも参加させてもらったが、初めエピソードを読んだとき、Pちゃんは交流会を緊張しながらもワクワクと楽しめたというエピソードなのか、本当に緊張し、とにかく頑張ってその時間を乗り切ったというエピソードなのか分からなかった。討議をしていくうちに、一張羅の服を着て来ていたことから小学校に行くことに期待を持っていたのかもしれない、また、へとへとになって帰ってきたが、後日、おもむろに文字の練習をしだしたことから、学校に行って勉強してきた気持ちになっていたのだろうかなどと想像が広がった。そこをエピソードの中に書いておいてほしい。一人ひとりの子どもを丁寧に見ていくことで、それぞれの子どもにとって交流会の経験の仕方が違い、どのような体験として根付いていったかが分かる。保育者は交流会での経験が子どもの心にどのように跳ね返っていつているのかを今以上に感じ取っていくことが求められるし、恐らくそれは小学校教師にも言えることである。普段あまり目立たない子どもがいいお兄さんぶりを発揮していたり、チャキチャキと仕切る子どもが園児に「一緒に行こう」と誘ったのだが、「いやだ」と断られたりしており、小学生の経験も様々である。確かに、小学校教諭の言葉にあったように、「小学校では交流会がスムーズにいくかどうか重点を置いて見るが、保育者たちは子どもの育ちに重点を置いて見ている」といった視点の違い、延いては文化の違いがあるが、子ども一人ひとりの心のありようを把握することは、養育・保育・教育に通底する「育てる」という営みの基本でもある。小学校ではどのような心を育てていくのか、それが保育園(所)・幼稚園の時代からどのようにつながっており、どうつなげていくのか、そのプロセスのイメージをしっかりと持つことが必要である。保育園(所)・幼稚園では心を育て、小学校ではカリキュラムを教えるのでは、連続性にはならない。心の育ちの連続性をいかに担保していくかが非常に大事だと思う。保育の場と学校教育の場に文化差があることを尊重しつつ、それが子どもの心の育ちをどういった形で支えていくための「差」であるのかを、各々の現場からのエピソードを出し合い、忌憚のない意見交換を通じて明らかにしていくことが必要だろう。

(3) 3年次

小学校

自校に入学してくる子どもたちのこれまでの育ちやどのように保育園(所)・幼稚園がかかわってきたかを知ることが、小学校にとって重要で、プラスになることだ



「保幼小連絡会」を新規実施

高倉小学校は、「自校に入学してくる子どもたちのこれまでの育ちやどのように保育園(所)・幼稚園がかかわってきたかを知ることが、小学校にとって重要で、プラスになることだ」ととらえ、平成26年度から新たに「保幼小連絡会」を実施することになりました。入学して少し経った5月に出身保育園(所)と幼稚園の先生方が招かれ、1年生の授業を参観し、その後に保幼小で協議する会です。

幼稚園

Q児の変容に驚く

授業を見た幼稚園教諭が、Q児の変容に驚きました。Q児は育ってきた背景がとても複雑で、幼稚園時代には学級集団の中では、自分が友達に受け入れられているかどうかをととても繊細に感じ、自分を守るために思いを強く言いすぎたり、手を出してしまったりすることが多く見られた子どもでした。そのQ児が、たいへん落ち着き、友達とも良い関係で体育の授業を受けていたのです。

そこで、Q児のエピソードを、幼稚園側と小学校側から出して、討議してみようということになりました。

それについては、中間報告会におけるスーパーバイザーの鯨岡先生から御示唆頂いている内容を踏まえて、計画を見直すことにしました。

3 中間報告会における鯨岡峻スーパーバイザーからの総評

- 「交流」
一般論ではなく、一人ひとりの子どもを丁寧に見ていくことを深める。
- 「連続性」
心を持った一個の主体である子どもが、一人の人間として連続的に育っていくという観点が欲しい。

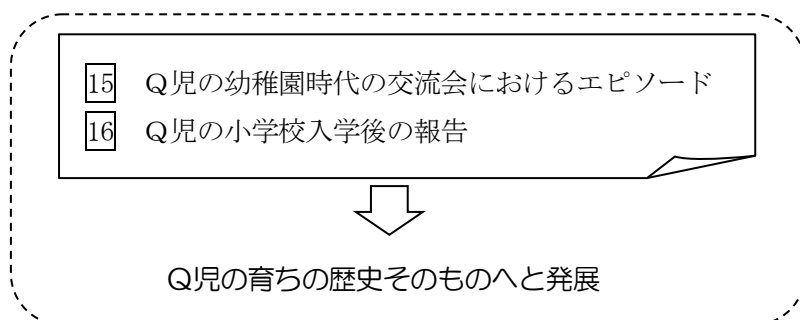
「交流」という言葉は一見分かりやすいが、その実態はどうだろうか。「交流」をすることにより、保育園(所)や幼稚園の子どもたちが小学校に憧れの気持ちを持ち、自信を持って小学校に行けるようになった、というような簡単な分かりやすい話に議論を落とし込み、「交流ができた」で終わってしまっていないだろうか。実際に交流をすると、積極的に参加する子どももいれば、ビビってしまう子どももいるなど、一人ひとりの子どもの心の動きは多様である。「交流」という言葉に含み込まれている様々な子どもの個別具体の姿に入り込んでいくのが研究だと思う。これまで行われてきた「交流をすれば〇〇のような成果があった」というような大雑把な一般論は終わりにしよう。今回一人ひとりの子どものエピソードを取り上げ、丁寧に子どもを見ていくことで、その子どもの中に様々な想いがあることが見えてきた。そこが大きな成果だと思う。それを更に深めていって欲しい。

もう一点は「連続性」という言葉についてである。「連続性」という言葉が安易に使われているのではないだろうか。ここ近年、「学びの連続性」という言葉がよく用いられているが、就学前の学びと就学後の学びがどうして連続しなければならないのかについて十分深い議論がないままに、言葉だけが一人歩きしている感がある。この研究プロジェクトでは「育ちの連続性」という言葉を用いられているが、まだ子どもの「心の育ちの連続性」というところまで話が入り込んでいないように感じる。私は、心を持った一個の主体である子どもが、一人の人間として連続的に育っていくという観点が欲しいと思う。そのことは学校に対して特に強く感じており、カリキュラムに従って様々な力をつけなければならないということは分かるが、一人の人間を育てているという視点が学校教育の中にもっとなければならないと思う。そして保育園(所)・幼稚園から小学校へ移行しても、一人ひとりの子どもの主体としての心の育ちは連続しているのだという感覚を持って欲しい。保育園(所)・幼稚園でいかに心の育ちを語っても、小学校にあがるとたちまち力をつけることを重視したかわりとなり、心の育ちが圧迫されていく。そうならないためにはどうしたらよいかを考えると、要録が一つの問題としてあがってくるのではないか。保育園(所)・幼稚園では、要録に一生懸命子どもの心の育ちを反映させようとしている。しかし、学校ではそれに見合った要録が書けていないと感じる。個人情報保護の観点からその点については書けないという意見も聞くが、そんなことでは、一人ひとりの子どもの心の育ちを見ていくという視点が十分に深められていかないのではないだろうか。このような現状の中、子どもの主体として心の育ちの連続性について、交流を通してはたして議論できるのだろうか。この点はこのプロジェクトの成否にかかってくるように思われる。

4 2グループ合同

鯨岡先生からアドバイスしていただいた視点で更に深めていくためには、Q児のエピソードを保幼小連携グループと子どもの育ちに関するグループとが一緒に討議することが有意義だと考え、合同で行うことにしました。

エピソードの内容は、幼稚園側から交流会のときの様子、小学校側からは保育園(所)・幼稚園が書いているようなエピソードの形式は書きにくいということで、小学校入学後の報告書のような形で出されました。



討議では、エピソードと報告書の中身そのものから、Q児の育ちの歴史についての話に発展していきました。

(1) 討議内容

小学校側からもエピソードを出すことになったんだけど、自分はQ児の担任ではない。

そこで、Q児の担任に話を聞きに行ったのだが、「何もない」と言われてしまい、何を書けばいいかとっても悩んだ。

そこで、入学前の様子を教えてもらおうと思って、幼稚園にお願いした。



小学校教諭



幼稚園教諭

幼稚園から、Q児の育ってきた背景や幼稚園での様子を書いて送ったの。

複雑な背景を背負って育ってきたことや、幼稚園での姿と担任の先生の細やかな配慮に、今の担任の先生と一緒に「すごいなあ」と読ませてもらったんだ。





幼稚園の頃は、自分が周りの友達に受け入れられているかどうかとても繊細に感じて、自分を守るために、思いを強く言い過ぎたり、グーパンチでたたいたりすることが多かったの。

Q児が安定した気持ちで幼稚園生活を送れるように、思いをしっかりと受け止めるようにした。

そして、自分の思いを友達に言葉で伝えることの大切さや、手を出して解決できることは何もないことを伝え続けてきたよ。



小学校で少し前にあったことなんだけど、運動場で4年生にぶつかられて倒れていたんだ。

近づいていったら、泣いているんだけど「自分で立つから近寄らん」といって。

そして、「あの子に謝ってもらいたい」と、一人で4年生の教室に行き、ぶつかった子どもを探し出し、その子の担任の先生に話をし、最後にはぶつかった子どもに謝ってもらっていた。

こんな自立した1年生は見たことがない。

幼稚園が心配しているような、人に自分から暴力をふるうことは全くないよ。



今年の小学校の運動会で、Q児が大玉ころがしのリレーに出ていたのを見た。

4人で一つの大玉を転がすのだけれど、Q児は体が大きいので、押したら勢いよく転がってしまう。

でもQ児は、皆がついてこられるように玉の速さを調整し、皆で転がしていこうとしていた。

幼稚園でドッジボールをしたときは、「自分が！」という思いから、人が持っているボールまで奪いに行き、ラグビーの様だったのに……。幼稚園で、自分を出しながらも、皆も気持ちいいということの大切さを繰り返してきた。

今、それを感じながら生活しているのを嬉しく思う。



メンバー

体育の授業で、勝敗にこだわったりしていないの？

ないなあ。

どちらかと言うと、他のチームの方があったかも。

Q児は他の子どもと協調して、チームのリーダー的に動いているよ。



メンバー

周りの子どもたちが、「幼稚園のときとえらく変わったなあ」とは思っていないのかな？

大人から見ると激変したとを感じるんだけど。



それがね、私はあまり変わってないと感じるの。

自分の力を発揮する方法が分かってきただけじゃないかなと。

冗談をしたりちょっかいを出したり、無理やり思いを通そうとしたりするよりも、皆と協調しながらやる方が自分にとっても楽しいということに気付いてきたのだと思う。

中京もえぎ幼稚園の先生方は、Q児をはじめ、多数の子どものことが心配だと、入学前に直接学校に申し送りに来られているんだけど、ちゃんと学校でやっていける状態に育てているよ。



それじゃ、育ってないなと感じるのはどんな子ども？

けっこうきっちりとされている園(所)から来る子どもがしんどいかな。園(所)では、お行儀よくする時間なんかも設けているみたいなんだけど、小学校では反対にきっちりとできないんだ。

伸びもない。

内面が育ってないんだろうね。

育っていることに気付いていない中京もえぎ幼稚園と、育ってないことに気付いていない保育園(所)や幼稚園……。



それじゃ、小学校の先生としては、どんなことが育っているといいと思う？

「水は溢れないと人に与えられない」と言われるように、十分に受け止められていることが大事になると思っている。



アドバイザー

小さい頃であれば、甘えたい心や自分のことを見て欲しいという思いが一定程度満たされていると、余裕を持った生活ができる。でも、そこが飢えていると「みて！みて！」という姿になるね。

結局、そこが足りていないと、上の学年にいても、人のことを考えられなかったり、攻撃的だったり、ずっと心が貧しくなってしまう。

人間形成において、家族、特に母親とのかかわりが大きいけれど、保育園(所)や幼稚園も大きく担っていると思うんだ。



幼児期と児童期では、子どもの発達とその時期に育とうとしているところが違うからだろうね。

エリクソンのライフサイクルの発達理論を例にとると、乳児期は基本的信頼感、幼児期の1～2歳は自律性、3～5歳は積極性の育ちが大切であり、保育園(所)・幼稚園の時代にそこまでをしっかりと培っておくべきものだと言われている。

その後の児童期には勤勉性へとつながる。

字を書いたり計算したりなど、大人社会の労働に直接つながる具体的なことを子ども自身が喜んで吸収する時期なんだ。



乳幼児期に培っておくべきものが育っていないと、勤勉性が育つ以前の問題が出てきてしまうということなのね。私たちの仕事は責任重大ね。



それじゃ、学校においても、「できる」「できない」だけでなく、心の準備が大事ということかな？

そうそう。

小学校の学習指導要領には「関心」「意欲」「態度」という項目があるように、気持ちの部分も大切にしているよ。

そもそも「してみたいな」と思わない子どもには、知識理解はつかないと考えている。

「豊かな学び」は、知識理解だけではないところに、いかに子どもを向かわせていくかが重要なんだ。

そのためには、ベースの部分の育ちがとても大きく、保育園(所)や幼稚園で様々な体験やいろいろな人と接する経験は、その後の育ちに大きく関係すると思う。



Q児の場合は、幼稚園の時代にしっかりとベースの部分が育っていたんだろうね。

そして、勉強ができた。

授業の中で活躍する場面がたくさんあり、周りから認められる機会も多く、自信を持つことができたんじゃないかな。



勉強ができる子どもは小学校の先生にとって貴重であり、どうしてもクラスの中心にしたり、困ったときに当てたりしてしまうよね。

でも、たとえ勉強ができて、その前のところが身についていないと、歪んだいやらしい形の有能感になっていきがちだと思う。

Q児は良い感じで育っているんじゃないかな。

この後、高学年になったところでどうなっていくか見てみたいね。



それじゃ、乳幼児期にしっかりとベースが育っていても、勉強が苦手な子どもはどうなるのかな？



勉強以外に何かしら得意分野を小学校の先生がうまく見出して、一人ひとりが活躍できるようにして欲しいな。

子どもが「そんなんバカらしいわ～」とは思わないような、現実社会に結びつく匂いのするような活動を、小学校の先生が準備するのはとても大事なことだと思うんだ。



今日はQ児のことを丁寧に見ていくことができて、保育園(所)・幼稚園と小学校が互いに大切にしたいことが少し見えてきたみたい。

他の子どもたちも同じように丁寧に見ていけるといいね。

(2) 考察

- 幼稚園でのQ児はこれまでの育ちの背景から、周りから受け入れられているか不安に感じ、思いを強く出しすぎたり、たたいたりすることがあったが、幼稚園の担任は、まずはそのような負の姿も含めてすべて受け止め、自分の思いを言葉で伝えること、手を出しても解決できることは何もないこと、自分を出しながらも皆も気持ちいいということの大切さを伝え続けていった。
- 1年生になり、落ち着いて授業を受け、友達関係も良好なQ児の変容を最初は驚いたものの、Q児自身が大きく変わった訳ではなく、自分の力を発揮する方法が分かっただけで、どうすることが気持ちよく過ごしていけるのかに気付いたのだろう。幼稚園で大切に伝えてきたことを感じて、小学校生活を送ってくれているのだと分かった。
- 一方、小学校教諭から見ると、上級生にもしっかりと自分の思いを伝える、決して人には手をあげない、勉強ができリーダー的な存在としてクラスの中で認められているQ児であるが、申し送りで少々聞いてはいたが、幼稚園時代そのような姿だったとは知らず、どうして幼稚園の先生がそこまで心配するのかも分からなかったらしい。しかし、幼稚園からの話を受け、幼稚園時代にしっかりと内面を育ててもらったことが今の姿につながっているのだと分かった。

Q児の具体的な話



保育園(所)・幼稚園、小学校で大切にしたいこと

- ア 小学校から見て保育園(所)・幼稚園時代に大切にしたいことが3点
- イ 保育園(所)・幼稚園から見て小学校時代に大切にしたいことが2点
- ウ 共に大切にしたいことが1点
- エ 保育園(所)・幼稚園が大切にしなければならないことが1点

ア 小学校から見て保育園(所)・幼稚園時代に大切にしたいこと

- 「十分に受け止めて」
ここが足りていないと、上の学年にいても、人のことを考えられなかったり、攻撃的だったりずっと心が貧しくなってしまいます。人間形成においては、家庭、特に母親とのかわりが大きいと思われますが、保育園(所)・幼稚園も大きく担っていると考えられます。
- 「様々な体験を」
「してみたい」という意欲のない子どもには、真の知識理解は身につかないととらえているそうです。保育園(所)・幼稚園で様々な体験やいろいろな人と接する経験は、その後の育ちに大きく関係すると考えられます。

- 「内面を育てて」

見た目だけできるようにしても、自分からしようと思える子どもには育っていません。結局、小学校ではできませんし、伸びもないそうです。見た目だけのできる子ではなく、内面の心を育てておくことが大切だと考えます。

イ 保育園(所)・幼稚園から見て小学校で大切にしたいこと

- 「子どもの心の育ちを引き継いで」

子どもの育ちは小学校1年生から始まる訳ではありません。一人ひとりに背景がありそこまでの歴史があります。そこを知って、その上に育ちを重ねて行って欲しいです。

- 「様々な良さを認めて」

乳幼児期にベースの部分がしっかりと育っていても、勉強が苦手な子どももいます。勉強以外に何かしら得意分野を見出して、一人ひとりが活躍できるようにして欲しいです。

ウ 共に大切にしたいこと

- 「保育園(所)・幼稚園と小学校で育ちを見る」

今回、保育園(所)・幼稚園と小学校で一緒に一人の子どもの育ちを見ることができたのは、とても大きかったと思います。保育園(所)・幼稚園のエピソードだけでは、その子がその後どのような人生経験をしながら大人になっていくのかが見えてきませんでした。小学校での姿をだし、小学校教諭も入って話をしていくことで、小学校に入ったあたりが少し見えてきました。このような機会をどんどんとつくっていくことが大切だと感じています。

エ 保育園(所)・幼稚園が大切にしなければならないこと

- 「その後を知り、今を見直す」

その後の育ちを知ることで保育園(所)・幼稚園の保育を見直していくべきなのだと思います。

Ⅶ 成果

さて、第3期の子どもの育ちの連続性研究プロジェクトのテーマは、「自信を育み、つなげる」でした。これまでの取組を振り返り、テーマについて考えてみたいと思います。

自信

その中の特に乳幼児期の自信とは、保育者側からできるようになるためにやらせて、できたことを褒めて、付けさせた自信ではなく、ありのままの自分ではないかと思える、根本的な自信がまずは大切であり、そこが十分に満たされていることで、自分からやってみようと思える、それら全体が自信だととらえました。そのためには、子どもの負の姿もまるごと受け止めること、その安心感の中で、その子に応じた援助をしながら、子ども自らが育っていくことを信じて待つ。そして、集団としては、互いを認め合える関係をつくっていくことです。その土台をしっかりと育てて、児童期へつないでいきたいです。

つなげる

特に心の育ちをつなげていきたいと考えますが、心の育ちは、保育園(所)・幼稚園時代だけあるいは小学校時代だけ切り離して考えられるものではなく、一生涯つながっています。

小学校は、乳幼児期の育ちを知り、その上に児童期としての育ちを重ねていくこと。保育園(所)・幼稚園は、その後の育ちを知ることで、自分の保育が本当の意味で子どもの心を育てられていたのかを検証し、保育を見直し、変えていかなければならないはずで。私たち保育者は、子どものその後の育ちを支える大切な土台をつくる責任を負っているのです。

そのためには

保育園(所)・幼稚園と小学校が一人ひとりを丁寧に見る連携をしていくことが重要だと考えます。

Ⅷ 課題

- 小学校生活になじめない子どもから、乳幼児期を見直す
- 保育園(所)・幼稚園、小学校と一緒にもっと様々なエピソードを見ていく

さて、今後の課題についてですが、2点あります。

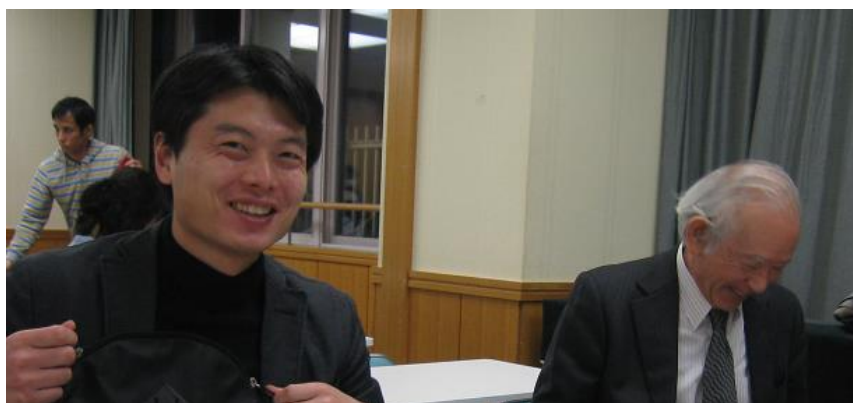
1点目は、Q児の姿を通して一人の子どもを幼児期と児童期の最初をつなげてみたのですが、Q児は小学校で生き生きと過ごしている子どもでした。幼児期にどのようなかわりが良かったのかという視点で話をすることができました。今後検討する場合、小学校生活になじめない子ども等を見ていくことで、乳幼児期における不適切なかわりや子どもの心に添えていないかわりが見えてくるのではないかと思います。先の姿から乳幼児期の保育を見直し、変えていきたいと考えます。

2点目は、今回研究プロジェクトが進むにつれ、自信についてメンバーのとらえが変わって

いったのですが、「自らがエピソードを書くこと、エピソードを読み合うことで、自らが感じ、気付くことを通してでしか、本当に分かったとは言えないのではないか」と実感したことです。実感したものを言葉で伝えることがとても難しいことです。

第3期の研究プロジェクトは終わりますが、またその成果や課題を引き継ぎ次へとつなげていきたいと考えます。しかし、新たなメンバーで始めると、また最初のところから始めなければなりませんが、京都市の保育の質の向上を願うと、難しいからとは言ってられません。そのためには、エピソード記述をもっと学んでいく必要がありますし、もっと様々な子どものエピソードを保育園(所)・幼稚園、小学校で丁寧に見ていきたいと考えています。





【子育て支援研究プロジェクト】

I 研究主題と設定理由

1 研究主題

親子の育ちを支える子育て支援

2 設定理由

(1) 研究メンバーの思いを本音で語る

前期の研究からの課題として、子育て支援の必要性や、今、求められている支援とはどのようなものなのかということについて、考えてみました。

保育園(所)・幼稚園における子育て支援が制度的にはあらゆる方法で展開されていますが、「何故、保育園(所)・幼稚園が子育て支援をしなければならないのか」という根本的な部分を論議することが大切だと考えました。支援者として、「保護者の子育ての不安や悩みに共感できるか」「支援しなければならないから支援をするのか」また、支援する側の主体を考え、「どうすれば、支援する側が納得をして支援をすることができるのか」そして、「求められる支援者とはどのようなものなのか」研究メンバーの子育て支援に対する考え方、思いを本音で語るところから始めました。

(2) テーマ設定までの経過と理由

本研究プロジェクトは第3期になりますが、平成16年度から始まった第1期は「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」として、子育て支援に取り組むNPO団体等の参画の下、子育て支援の当事者や支援者に伝えたい子育てに関する情報や実践例を5つのリーフレットにまとめて発行しました。地域への子育て支援、在園児への子育て支援で、「保育園(所)・幼稚園で今必要とされている子育て支援」を検討していくことをねらいに第2期の研究プロジェクトを進めてきました。課題としては、子育て支援に関する全職員の理解、地域の分析、情報収集と発信、家から出て来られない親子への支援、子どもの育ちから関係機関とのネットワークが挙がってきました。

第3期では第2期の課題を受け、「親の親育ちを支える『子育て支援』を考える」をテーマに研究をスタートしました。当初は、“子育て支援をしなければならない”という意識でしたが、「本当に子育て支援をしなければならないのだろうか」など、メンバーが本音で討議していく中で、子育て支援というと親を支えるということに視点がいきがちだが、根本にあるのは“子どもの育ちのため”，また“親に寄り添い共に考える”ことが大切だと気付きました。そこで、研究テーマを「親子の育ちを支える子育て支援」に変更しました。

研究会では、各園(所)の子育て支援の実践を伝え合い、自分自身の支援に対する考え方を本音で話し合うところから始め、今の親が抱えているしんどさとは何なのかということを、保育園(所)と幼稚園の共通性と違いを整理しながら研究を進めることとしました。

II 研究方法

- 1 子育て支援施設・関係機関の見学、視察
- 2 保育園(所)・幼稚園における子育て支援の共通性と違いについての検討
- 3 こどもみらい館共同機構研修の受講
- 4 エピソード記述の検討

III 期間

平成24年10月～平成27年3月

IV アドバイザー

1 スーパーバイザー

- 鯨岡峻さん（京都大学名誉教授、中京大学客員教授）
- エピソード討議の内容はもちろんのこと、様々な取組内容の摘録をすべて読んでくださり、子育て支援について様々な御示唆を頂きました。

2 研究アドバイザー

- 大倉得史さん（京都大学大学院准教授）
- エピソードについて、書き方から教えてくださり、討議ではテーマに迫っていけるように具体的にアドバイスを頂きました。

V 取組概要

1 平成24年度

年月日	会	内 容
H. 24 10/26(金)	第1回会合	自己紹介と各園(所)の親子の様子について討議 子育て支援研究プロジェクトの方向性について討議
11/ 9(金)	見学	こどもみらい館事業「ほっこり子育てひろば」 『親子でいっしょにあそぼう』0歳対象
11/16(金)	見学	こどもみらい館事業「ほっこり子育てひろば」 『いつくしむ』0歳対象
11/22(木)	第2回会合	「ほっこり子育てひろば」の見学後の討議と 各園(所)の情報交換
12/19(水)	第3回会合	京都市のニーズ調査から支援を考える1
H. 25 1/24(木)	第4回会合	京都市のニーズ調査から支援を考える2
2/22(金)	見学 第5回会合	こどもみらい館事業「子育ての井戸端会議」 見学後の討議 エピソード記述について アドバイザー：大倉得史さん

3/7(木)	第6回会合	研究テーマの検討と研究の方向性について討議
--------	-------	-----------------------

2 平成25年度

年月日	会	内容
H. 25 4/22(月)	第7回会合	今年度の方向性について確認
5/13(月)	共同機構研修 受講	「保育園(所)・幼稚園に求められる地域の子育て家庭への支援」講師：橋本真紀さん(関西学院大学准教授)
5/18(土)	視察	聚楽保育所「園庭開放 “のびのびランド”」
5/27(月)	視察	聚楽保育所「0歳ルーム “おしゃべりタイム”」
6/14(金)	共同機構研修 受講	「保育園(所)・幼稚園における子育て支援と関係機関との連携」講師：金子恵美さん(日本社会事業大学准教授)
7/12(金)	第8回会合	視察事後討議 エピソード討議1回目 アドバイザー：大倉得史さん
8/19(月)	視察	第二児童福祉センター
9/2(月)	第9回会合	視察事後討議 エピソード討議2回目 アドバイザー：大倉得史さん
10/24(木)	視察	つどいの広場「桜木ふれ愛の家」「どんぐり広場」
11/15(金)	第10回会合	困難事例検討会 講師：横江真喜子さん(京都市保健福祉局子育て支援部保育課担当係長・保健師)
12/6(金)	第11回会合	保育園(所)・幼稚園の共通性と違いについてグループ討議 これまでのまとめと課題について討議
H. 26 1/8(水)	第12回会合	中間報告会に向けて討議と確認
1/29(水)	中間報告会	
2/21(金)	第13回会合	エピソード討議3回目 アドバイザー：大倉得史さん
3/17(月)	第14回会合	エピソード討議4回目 アドバイザー：大倉得史さん

3 平成26年度

H. 26 4/28(月)	第15回会合	中間報告会を受けて今年度の方向性について討議と確認
5/14(水)	視察	住吉児童館
6/16(月)	共同機構研修 受講	講義「主体としての心を育てる保育」 講師：大倉得史さん(京都大学大学院准教授)
7/14(月)	第16回会合	研修受講後の討議 エピソード討議5回目 アドバイザー：大倉得史さん

8/25(月)	第17回会合	保育園(所)・幼稚園の共通性と違いについての討議
9/12(金)	第18回会合	エピソード討議6回目 アドバイザー：大倉得史さん
10/20(月)	第19回会合	対応事例検討，関係構築の方法について討議と確認
11/20(木)	第20回会合	これまでの研究における気付きと学びについて討議
12/19(金)	第21回会合	報告会に向けて討議と準備
H.27 1/19(月)	第22回会合	報告会に向けて確認
1/26(月)	報告会	

VI 研究内容

1 子育て支援施設・関係機関の見学，視察

(1) 聚楽保育所地域子育て支援拠点事業 見学

事業名 「園庭開放 “のびのびランド”」

[見学実施保育所から]

- 所長から聚楽保育所の概要説明
- 保育所全体で地域の親子を支える姿勢を大事にしている。保育所での日常の取組に地域の親子が参加できるよう計画表を作成し，参加しやすくしている。
- 地域子育て支援拠点担当者から事業内容についての説明
保健センターの4ヶ月健診，1歳6ヶ月健診に同席し，母親の状況や発達で支援が必要な場合は，保護者に家庭訪問の希望の有無を確認後，訪問している。
- 家庭訪問から，一時預かり保育，親子半日保育体験に誘いかけ，親の様々な悩みに対して，母親が自分に自信が持てるようなかわりができるまで寄り添う。

[参加者の気付きと学び]

- ・ 保育者の入所児へのかかわり方を見ることから母親自らが気付いたり，子育ての相談ができる場であったりする等，園庭開放もやり方次第で大きな子育て支援になると感じました。入所児の保育をしっかりと行うことが，地域の子育て支援につながるのではないかと思います。
- ・ 「いつでもどうぞ」という意識を全職員が持つことが大事だと感じました。
この意識こそが一番大事で根っここのようなものであると思います。どんな子育て支援もこの意識がなければ何もできないかと思いました。
- ・ このような場があれば，保育者が少し援助するだけで，母親同士で助け合い，地域で孤立している親子にも，力をつけた母親が声をかけたり，つながるきっかけ作りをしたりできるのではないかと思います。
- ・ 気軽に出入りができることの必要性を感じたので，全く新しいことから始めるのではなく，今，行っている子育て支援の中からもっと気軽に利用できる工夫など，できることから一つひとつを積み上げていきたいと思いました。
- ・ 園庭開放に来ている母親も，みんなで子どもたちを見ているという温かな感じが
あり，在所児と地域の親子がかかわって遊んでいるように感じました。



- ・ 全体で未就園児を受け入れようと共通理解や取組を進めていくことの大事さをとても感じました。

事業名「0歳ルーム “おしゃべりタイム”」

[見学実施保育所から]

- ・ 保護者同士の交流の場を提供
- ・ 地域の民生委員にも来てもらうなど
区の社会福祉協議会とも協力し合って支援している。



[参加者の気づきと学び]

- ・ 担当保育者や民生委員の温かい雰囲気に含まれているためか、参加されている親子は皆さん穏やかな様子で交流されていると感じました。
- ・ 担当者が保育所にいなくても民生委員，社会福祉協議会，地域の人につながっておくことが大事であると感じました。
- ・ 公園に遊びに行くのとは違い，このような安全で安心できる場所に来て話を聞いてもらえることが必要だと思いました。
- ・ 集える場の大切さを感じ，そこでの情報交換で安心して子育てされていると感じました。
- ・ 今ある空間の中でできる来園者の居場所作りの工夫が必要であると感じました。また，来園者が安心でき，求めている空間を具体的な形で見ることができ，参考になりました。
- ・ 子育てについて話をできる知り合いが一人できることで大きな安心感になるはずである。母親たちにとっては，子育てを援助してもらえる人との出会いの場であることが大切なのだと感じました。

【聚楽保育所地域子育て支援拠点事業の視察で学んだこと】

- 地域子育て支援拠点事業・子育て支援事業の事業内容の基本的な捉え方について確認し合えた。
- 困難ケースに対しては専門機関との連携の元で行うことを確認し，各園でできる支援について考えていく方向性ができた。
- 家庭訪問事業や一時預かり，在園児の面談の中で，母親の心情から見えてくる「今の親の根底にあるしんどさ」について認識できた。
- 園庭開放を通して，ニーズがなくても行ける場所（何もなくても出かけて行ける場所，安心感のある場所）の必要性について共通理解ができた。

(2) 第二児童福祉センター視察

施設見学（当日，検査などが入っているところ以外の部屋を見学しました）



地域のコミュニティーセンターを改築して現在の施設となる。相談の部屋，子どもの発達検査の部屋，会議室を見学。地域のコミュニティーセンターとの間仕切りスペース等に改進黨育所の年長児の絵が飾られてあり，気持ちをほっこりさせる雰囲気がある。

[第二児童福祉センター長から]

京都市の児童虐待相談・通告また，京都市第二児童相談所における児童虐待相談の流れについて資料に基づき説明を受け，「虐待」に対してのとらえ方や，「虐待」をしてしまう親への思いや接し方で大事なことについてお話を伺いました。



- 「虐待」という言葉そのものが衝撃的な言葉であり，「虐待」とは，子どもに対する親の権利の乱用という意味である。「虐待」という言葉よりも「養育の不適切さの度合い」ではないかと思う。
- 温かい人と人とのかけがえがあることがあって初めて子どもが育っていくが，我々がかかわっている親は，その人自身がそういう生活を経験していない。
- 相手が「話せてよかった」「本当のことが言えてよかった」と感じ，こちらも「話してくれてよかった」「一緒に考えよう」「こんなふうにしたらどうやら」など，手間暇かけて支援していくことが大事であると考えている。

[参加者の気づきと学び]

- ・ ありのままの保護者を受け止め，その上で一緒に問題解決の方法を考え，保護者が自己決定できるまでを支えることが大切だと考えました。
- ・ “しんどさ”や“苦勞”を温かく受け止める雰囲気を作ることが大切であると感じました。
- ・ 在宅での子どもの安全・安心を担保するには，親支援が大切で，保育園(所)や幼稚園，児童館がその役割を担えば，健康な人が増え重篤化しないと話されていたのが印象的でした。
- ・ 一番大切なのは地域をまき込んだ日々の親子への支援であると同時に，妊娠期からの支援（プレパパママ），ひいては，中高生・児童期からの支援（チャレンジ体験）が必要になってくるのだと思います。
- ・ 「親支援は，支援する側がかかりつけ医の医師の役割を担う」ということが心に響きました。
- ・ 子どもをめぐる状況の厳しさ，その子どもたちの受け皿としての任務の重さを痛感しました。
- ・ 虐待，発達相談の事例が増加する現在，その両方を対象としていることの大変さを感じました。
- ・ どんなに虐待をしている親であっても，まずは「よいところを見つけて“褒める”ことをしている」というセンター長の言葉が心に響き，今，行っている支援を見

直していこうと思いました。

【第二児童福祉センター視察での学びと今後の支援のあり方を考える】

- 虐待」は養育の不適切さの度合いであり、日々のかかわりは子育て支援機関、保育園(所)・幼稚園やつどいの広場、児童館が担い、保護者を支える。緊急の場合は児童福祉センターへつなぐことが大事である。
- 自己肯定感を持ってない、また、自身も虐待を受けてきた保護者に対し、丁寧な対応に心がけ、温かく接し安心して話ができる雰囲気作りを心がけ、思いや困り感に対して傾聴し、ありのままを受け止めていくことを大切にしていきたい。
- 親同士の関係作りが日常的に重要
 - 1 仲間はずれを作らない。
 - 2 人前にでることを得意としない親へサポートする。
 - 3 保護者が互いに相手のしんどさや苦労を温かく受け止める雰囲気を作る。
- 保護者や子どもが地域の中で支えてもらえる関係を作ることが大切で、そのためには、支援者である自分自身が地域と関係を作り、保護者と保護者をつなぐことも重要であると考えます。
- 視察の際に視聴した『乳幼児揺さぶられ症候群（ＳＢＳ）』のDVDは地域のお母さんたちのつどいの場や園(所)で一緒に見る機会を作る。
- 保育園(所)・幼稚園が地域の拠点となりながら、「身近な相談窓口」となっていけたらよい。

(3) 京都市子育て支援活動いきいきセンター
つどいの広場視察

「桜木ふれ愛の家」

[見学実施施設から]



- 日常的に地域とのつながりを持っておかないと大きな災害などが起こった時にお互い助け合えない。日頃から「おはよう」「こんにちは」など言葉を交わしていることが大事で、近所とは仲良くするようにということを伝えている。
- 我々が説得して納得させることは難しいが、親同士が話し合って「大丈夫」ということで安心し、その安心が自信につながっている。
- 当事者に話をする事も大事だが、周りがそういう雰囲気を作り出すことが大事で、我々は地域の人をまき込んでそういう雰囲気を作っていこうという取組を徐々にやろうとしているところである。
- 子育て支援は思いつきでやるのではなく、基本理念をきちんと持ち、地域を盛り上げていくことを地域の人たちと一緒にやっていかなければ意味がない。

[参加者の気付きと学び]

- ・ 昔は当たり前に行われていた地域とのつながりを、今のこの現状の中もう一度見直し、人間同士の温かなふれ合いの中で、大人も安心して過ごすことで子どもも安心だという風土を取り戻していくことを大事に考えられていると思いました。
- ・ 子育て支援において関係機関との連携、民生委員、主任児童委員、地域との連携が大切であるということが、様々なところで言われているが改めてその大切さを感じました。また、実際に連携の実践の話を聞くことができ、ネットワーク作りの大切さを考えさせられました。
- ・ お年寄りから赤ちゃんまで地域の人皆が、知り合い、声を掛け合い、ちょっとした助け合いができるような町づくりをしていくことが大切だと感じました。

「どんぐり広場」

[見学実施施設から]

- 日本国内の北から南、または、海外から留学で来られた方の利用があることが特徴的で、その方たちも何らかの方法でコミュニケーションをされている。
- 地域（新洞小学校の跡地）の民生委員主催のミルキークラブ（月一回）の案内や、児童館の取組には民生委員やどんぐり広場からも手伝いに行っている。
- 子どもの成長を見てもらい、悩みや心配ごとが言えることは母親の安心につながっているのではないかと思う。“京都のバーバ”と子どもたちが言っているらしい。ここは子どもの遊び場であると同時に母親がほっこり、ゆったり、のんびりできる場所であることを大事にしている。
- 「こうしてください」「こうならなければ」というような支援者の押し付けではなく、母親の思いを大切にしている。支援は子どもが育つことだけではなく、同じように母親も父親も育つことだと考えている。



[参加者の気付きと学び]

- ・ 母親たちにとっては、京都のお母さんの存在であり、その人の所に行くとはっとする、話してみたいくなる雰囲気と安心感があり、この雰囲気が支援する際にまず必要であるということを改めて感じました。
- ・ 母親たちの持っている力を引き出すという点では、今の子育て支援で非常に大事な部分を実践されていると感じました。
- ・ 母親同士をつなげる大切な場となっており、母親同士が自分たちでつながろうとする様子を聞かせてもらえました。支援者からの話でなく母親同士の会話の中で「同じなんだ、大丈夫なんだ」という安心感が持てる、それが自信につながるので大切なことだと思いました。

- ・ 「ここは保育をする場所ではないんです」という言葉に、幼稚園との違いを感じました。母親に育児のポイントや子ども達の様子についてアドバイスをするのではなく、相手から求められれば必要に応じて答える。それ以外はみんな同じ、その場に来てくれただけでいいという大きな受け皿が今の親たちから求められていることなのかなと感じました。
- ・ 支援者というよりも子育ての先輩的なアドバイザーとして、母親の気持ちに寄り添ってかわっておられ、このような場がもっとたくさんできればよいと思います。

【つどいの広場の視察での学びと今後の支援のあり方考える】

- 視察を受け、実際の支援の場を見ることで、自身や自園の支援のあり方を見つめ直す機会となった。
- 職員間で話し合いの場を持ち、できることから少しずつ始めているということやその方向に向かっている等の報告を聞くことで、各園の支援の取組の更なる意欲につながった。

(4) 困難事例検討会

〔保健師からの事例報告を受ける〕

困難事例の個別的な支援を含め講義いただきました。

テーマ「個別支援を中心に地域における子育て支援を考える」

地域における子育て支援の留意点として、孤立から開放し、安心して子育てできる地域を作ること。子育てにおいて誰にも相談できない人は育児の負担感が大きくなり、そこから虐待に進んでいく場合がある。そこで、虐待の早期発見早期対応は子どもだけではなく、親への援助が必要になる。子育ては社会全体で行っていく風潮を作ることが大事である。

相談を受けるときの基本姿勢として、親の思いを受け止め、相互関係を作ることから、親を自立へと導き、自己決定ができるよう援助する。そして、援助方法を考えるとき、家族の中で誰がキーパーソンになっているのかを見つけることが大切で、それにより問題が解決しやすくなる。また、親が語る主観的な世界を受け止め、その世界観を理解し共有していくこと。そして秘密を保持し、安心して話せるようにすることが重要である。

支援者としては、自分がどういうケースワークをしやすいタイプなのか知っておくことが大事である。そして、園長や所長など、自分をよく知っていてくれる人や、専門家など経験豊富な人に聞くなど客観的に見てくれる人の存在が大事である。一つの機関だけで抱え込むことは危険であり、いろいろな機関にSOSを出し、事例検討会で一緒に考えていくことが大事である。

関係機関と連携する際の留意点としては、相手の立場を理解し、各々の機関の有効な役割が果たせるように根気よく付き合っていくことが大切である。また、個々の機

関だけでは限界があるので、役割分担をする。さらに、援助方針の意思統一をし、一番苦勞している援助者を支えていくなど、援助者を孤独にしないように連携を取りながら行うことが大事である。見守るか、必要な機関につなぐかを判断し、関係機関が動かない場合はそれを動かしていくことがネットワークには必要になってくる。

【困難事例からの気づきと学び】

- 困難ケースの事例を聞いて、関係機関と連携することがとても重要であることをメンバーそれぞれが改めて感じる機会となった。
- 保育園(所)・幼稚園などで通告が必要になるケースもあるが、児童相談所や福祉事務所に相談するなど、1つの機関だけで抱え込むことは危険であること、また、支援する人を孤独にしないことが必要であることを認識した。
- 発達面や虐待の疑い等、入園(所)後に園(所)側で気付くこともあるが、ためらわず福祉事務所に聞くなど、情報を待つのではなく、積極的に情報を得ることが大事であるということが確認できた。
- 様々な関係機関で支援していくことで、よりよい支援の手立てを見つけていけるということの理解が持てた。
- 困難ケースの家庭に対して「受け止める」ことを基本とした支援をし、信頼関係を築くことで少しでも重篤化を防げるようにしていくことが、保育園(所)・幼稚園の役割であることをメンバーが再認識することができた。



(5) 住吉児童館視察

[見学実施施設館長から]

- 児童館イコール学童保育というイメージが定着しているが、児童館は0歳～18歳を対象としているので学童保育以外の部分をどう活性化していくかについて施設長会でここ数年、声高に言われているところである。
- 子ども育成・子育て支援・地域貢献の3つの柱に分けて事業展開し、各年齢層それぞれのプログラムをあてはめている。
- 児童館は生活に密着し、普段の暮らしの一部でありたいと思う。
- 母親は、子育てについて聴きたいことがたくさんあると思うが、それを母親同士の交流の中で解決しているのだろうと思う。
- 様々な課題がある子どもが学校や家庭では見せない姿を児童館で見せているのだと思う。子どもの居場所をつくり、課題をキャッチできる福祉施設でありたい。

【住吉児童館を視察しての気付きと学び】

- 地域の子どもや、子育て中の親が安心して利用できる施設であること。
- 『中学生と赤ちゃんの交流事業』を含め、世代間のふれあいの中で、「自分は大切にされてきた」という自己肯定感が持てるよう導いている。
- 親同士が交流することで悩みの軽減につながっている。その部分を大切に様々な活動につなげていることを感じた。

【視察や見学を通して】

保護者の悩みに対して答えを返すのではなく、保護者同士をつなぐこと、また、保護者が自分で考えたり、気付いたりすることができるように導くこと、そのためには支援者は温かく、「いつでもどうぞ」というように迎え、話しやすい雰囲気を持つことの大切さを感じました。親子に丁寧に寄り添い、支援者も親もお互いに人柄を知って、よい関係を築いていくことが大事であることを学びました。

2 保育園(所)・幼稚園における子育て支援の共通性と違いについて

保育園(所)や幼稚園は、親子が安心して過ごせる場所であることは共通していますが、未就園児と在園児の保護者への支援ではどのような現状があるのかについて話し合いました。

(1) 未就園児の保護者への支援の現状について

保育園(所)では、園庭開放で同年齢や少し大きい子どもと共に遊べる環境があり、相談できる保育者等、専門職がいること、また、園庭開放から一時保育につなげることができる良さもあります。親の就労や発達面で気になる子どもの一時保育を希望する家庭に対して、受け入れ体制が十分でないなどの課題があります。

幼稚園では、園庭開放や未就園児の教室を実施しています。親自身のリフレッシュや、家で子どもと二人で過ごすのがしんどいという親や、教育や保育を求めて利用する親などです。未就園児が他の園児と交流する良さはありますが、在園児とのスピード感の違いや、0歳、1歳児に合わせた場所作りや環境面での難しさがあります。

(2) 在園児の保護者への支援の現状について

保育園(所)の場合、子どもを保育園(所)に任せきりになり、子どもに向き合えない保護者がいる現状があります。また、送迎時間が異なることから、怪我やトラブルなどに対して保護者としっかりと対応できないと不信感につながることもあります。

幼稚園の場合は、子どもへ気持ちが向かいすぎることや、保護者同志が送迎で毎日顔を合わせるが多い分、トラブルになることもあります。その場合、園がどこまで介入するかは難しい問題ですが、保護者同士のトラブルが子どもの関係に響くこともあります。

【共通性と違いについての気付きと学び】

- 保育園(所)は、保護者と保育者が一緒に子育てできるように、行事のあり方や、日々の子どもの様子を送迎時やクラスだより等で丁寧に発信していくこと。怪我やトラブルに対しては、職員間で連携し、伝言等その日の状況を適切に伝えることで、大きな不信感につながらないようにします。日常の信頼関係がこのような場でも保護者の安心感につながることを確認し合いました。
- 幼稚園では、保護者同士の関係が子どもの関係につながることもあるので、子どもが低年齢のうちに個々の親の気持ちを受け止めること。そして、園と親で細かい連携がないと歪みが出ることもあるので、教職員間でしっかり連携をとり、「みんなでみてよ」という地域全体の見守りを大事に考えている。
- **共通性としては**、子育ての視点が、「心の豊かさ」よりも目に見えるものに重きを置く傾向になっている。
- 保育園(所)・幼稚園の違いはあるが、親が子育てに気持ちが向かえるように親子の気持ちを受け止める。そして、保育園(所)・幼稚園だからこそできる安全で安心な環境を生かし、地域の親子が安心して過ごせる場所作りをしていくことは共通している。

3 こどもみらい館共同機構研修会の受講での気付きと学び

- (1) 「保育園(所)・幼稚園に求められる地域の子育て家庭への支援」橋本真紀さん
- (2) 「保育園(所)・幼稚園における子育て支援と関係機関との連携」金子恵美さん

【(1)(2)の研修を受けての気付きと学びの視点】

① 今、必要な子育て支援とは

- ・ 日常的責任を負っている親やその周りの人を支える。
- ・ 短期的な目標だけでなく、将来に向けて親子が生き生きと自分らしく、自己肯定感に支えられながら生活できるような基礎作りを支える。
- ・ 最終の目標をしっかりとらえて、その時々段階に応じての接し方や、フォローなど支援のやり方を変えていく。
- ・ 地域の色々な情報をつかみ、人と人の結びつきを考え、地域にバトンタッチしていくことが、関係機関との連携につながる。
- ・ 知っている「顔」があり、関係をつなぐ「顔」があること。
- ・ 全ての人に参加できる親子の居場所作りをする。
- ・ その親が何に困っているか、必要としているか見極める専門性を持つ。
- ・ 「保育者の温かい眼差しがあることで、親は本当は話したくない負の部分の話しはじめるようになる」という思いを理解する。
- ・ 「どのような子どもに育ってほしいか」という親の思いを引き出せるような支援をしていく。

② 保育園(所)・幼稚園に求められる支援とは

- ・ 自分の経験に基づいたアドバイスをして子育て支援をしたという自己満足に終わらない。
- ・ 向き合う支援ではなく、隣で同じ方向を見ながら支援をするというスタンスが大事である。
- ・ 子育ての知恵を「肌で感じる」ことができるような支援をする。
- ・ グループで来る人も個別でかかわっていけるようにする。
- ・ 「場をつくる」ということは、逆にその場に来る人を選んでいることでもあり、支援者の自己満足にもつながることを知り、また、「行けない場」にもなる可能性があるということを知っておく。
- ・ 例えば、児童館との連携では、年長児が手紙を持っていくなども連携を深める一つの方法である。
- ・ 保育者又は支援者は、情報を提供できるよう知識を身につけるとともに、保護者を「受容」から「自己決定」へ導くためには、まず、傾聴する。そして、一緒に不安を整理し、親の不安に距離を置き、客観化できるまでのプロセスを共に歩む。
- ・ 保護者がどのように育ってきたかということに思いをはせ、保護者の不適切な行動には原因があることを理解しようとする。
- ・ 保育者の持っている情報が活用できるよう相手に伝わるように話す。
- ・ 試行錯誤しながら親として育っていくことを十分理解し支える。
- ・ 保育園(所)・幼稚園に親近感を持つ人ばかりではないことを認識する。
- ・ 今、行っている支援の視点を見直す。
- ・ 親同士をつなぐ役割が求められている。
- ・ 子どもが安心・安全に遊べる場所を提供する。
- ・ 保護者が互いの子育てを学ぶ機会を提供し、自分の子育てを振り返る場を設ける。
- ・ 親同士や担当職員と気軽に子育ての悩みを話し合えるようにする。
- ・ 保育者又は支援者は、やさしく、親がほっとできる表情や態度、雰囲気を持ち、コミュニケーションのスキルをあげる。
- ・ その人の波長に合わせて、相手を見る専門性を持つ。
- ・ 保護者が子どもをどのように育てたいのかを知り、親子のよい関係づくりを支える。
- ・ 子育ての負担や不安を抱えた保護者や、発達が気になる子どもを早く見極め支援する。
- ・ 保護者の「認められたい」という気持ちを保育者又は支援者は理解する。

③ 関係機関との連携をどのようにとらえたか

- ・ 地域資源がある場所の把握をすることで、親子に必要な支援ができる。
- ・ 早期に適切な支援に結びつけるスキルが必要である。

- ・ 虐待や見守りが必要なケースは緊急性が求められる。
- ・ 民生委員など地域を基盤とした支援が大切である。
- ・ 各機関の専門性を活かし合って、地域の子育て支援をしていくことが必要である。
- ・ 小学校との連携の中で、保育園(所)・幼稚園では何を大事にしているか互いに参観し学び合うことで、お互いの理解が深まる。
- ・ 事例検討やケース会議でつながりをより太く深くし、同じ視点で支援する。
- ・ 気になる子どもに対して、専門機関に結び付け、子どもの育ちを保障する。
- ・ 関係機関を訪問して顔見知りになる。
(参加要請, ボランティアの活用, チラシ配布時の見学, 小学校行事の参観など)
- ・ 各機関が共に研修し、考え方を共有する場を作り、子どもの今と未来を地域社会全体で守る。

4 エピソード記述からエピソード討議へ

最初の年には

研修1年目の1回目のエピソード討議は「親と一緒に歩いていけるような子育て支援」をテーマに9つのエピソードが持ち寄られました。

- ① 我が子を不用意に叱ってしまうことに悩む母親
- ② 我が子の行動にしんどさを抱える母親
- ③ 完璧な子育てをしたい母親と自我が出てきた我が子
- ④ 我が子の友だちとのかかわりに悩む母親
- ⑤ 保育者のまなざしと母親のしんどさ
- ⑥ 母親, 祖母, 子どもの思いを受け止める子育て支援
- ⑦ 一人ひとりに無心に寄り添う子育て支援
- ⑧ みんなと一緒に活動できるようになってほしい母親の思い
- ⑨ 親のために支援者としてできること

2回目は、1回目と同じ親子を追ってエピソードを記述しました。同じ親子で2つのエピソード記述を検討したことで親子の経過がよく分かりました。またエピソード記述をすることで、保育者又は支援者としての視点の深まりの変化が見られ、その後の親子へのかかわり等、様々な変容がありました。

エピソード：その1

このエピソードは「親と一緒に歩いていけるような子育て支援」をテーマに記述しました。母親の思い, 子どもの思い, 母親と担当者の心が通い合ったと感じる瞬間の「接面」, 子どもと担当者の心が通い合ったと感じる瞬間の「接面」, 担当者の心の動きについて話し合いました。

エピソード

保育園 F 子育て支援担当保育者

1 テーマの捉え方

子育て支援研究プロジェクトチームで、テーマを「親子の育ちを支える子育て支援」とした。これは具体的にはこれまで受けた研修で共通している「子どもや親の思いを受け止め保育者の思いを届ける支援」につながるのではないかと考える。

親や子どもが「思いを受け止めてもらえた」としっかりと実感できる支援ができているか、また保育者の思いや考えを子どもや親に返す時、「あなたのことを大切に思っている」という思いがしっかりと伝わる支援ができているかを課題にして支援をするようにしている。

自園の遊びの場に参加する親は、自分の不安や悩みを誰かに聞いてもらいたい、受け止めてもらいたい、何かヒントを得て前に進みたいと思っている。まずはゆったりと構えて、お母さんが話しやすい温かい雰囲気をつくり、一日一日の積み重ねを大切にして、この人になら安心して相談できるという信頼関係を築いていくこと、親同士をつなげ子育て仲間をつかっていくよう工夫することが必要である。また子どもの育ちという観点からみれば、それぞれの園(所)ができる範囲で遊びの場を設け、地域の未就園の子どもたちにもかかわり合っ

2 エピソード記述 「Aはどうしてそんなにいじわるなの!!」

(1) 背景

Aちゃん(女児、2歳3ヶ月)は、父母との3人家族である。父親の転勤により3月末に関東から引っ越してきた。初めての転勤だが、京都にも長くて2年の居住になる予定とのことである。母親自身も関東出身のため京都には親戚も友だちもない。近所の公園に出かけても子どもの姿を見かけることはほとんどなかったらしい。母親は関東に住んでいるとき、公務員(栄養士)として資格を活かし、やりがいのある仕事をしていたことを後日語ってくれた。父親の転勤の通知が来たとき、母親は一緒に関西に来るかどうかが真剣に迷ったが、父親が大好きなAちゃんの思いを大切にしようと、仕事を辞める決断をした。しかし知り合いもなく、児童館に行っても関東弁であることから母親自身がそのことを気にしてその場に馴染めないことや、親子二人で向き合う子育て中心の毎日はどうしても子どもにのみ目がいき、子どもの姿が自分の望む姿ではないことに対して何とかしたいという思いが強くなるよう

で、子育てを完璧にこなそうとする場面がみられることがあった。

関東にいた頃、母親は仕事を持っていたため、Aちゃんは保育経験もあり「お友だちと遊びたがるので、保健センターでいただいたチラシを見て来ました」と初日はわざわざ電車に乗っての来園だった。地域の園庭開放の一覧表を渡し、家の近くに児童館があること、他にもいろいろな支援の場があることを伝えた。初日から1ヶ月程、2週間に1回程の来園であった。その間色々なところに行かれ、児童館のリトミックに参加した時、自分の子どもはそ

の中に入れない、“できる子”なのに周りの雰囲気に圧倒されて入らない、どこにいてもそういう状況になり居場所がない、そのことから子どもが興味のある遊びを選べる自園に戻

ってきて今は週2～3回参加している。登園時、降園時のあいさつ、絵本を借りた時の「ありがとう」など厳しくしつけようとしている様子が見える。

(2) エピソード1

2歳4ヶ月目のある日、その日は在園児の母親が講師を務める消しゴムはんこづくりの日であった。6組の親子の参加でカッターを使用するため、他の親はパイプいすと高さのある机で講習を受け、講習には参加しないが子どもを見守ってくれるボランティアのお母さんと私の二人で、7人の子どもを遊ばせていた。

Aちゃんがなかなか朝起きられなかったということで、開始時刻より15分ほど遅れてA児親子が来園した。講師のお母さんから「大丈夫。今始めたばかりだから・・・」と励まされながら、仲間に加わった。少し離れたままごとコーナーで、先にフライパンのおもちゃで遊んでいたBちゃんと後から来たAちゃん、フライパンの取り合いになった。嫌がるBちゃんから無理やり大声をあげて取り上げようとするAちゃんに対して、母親が慌てて走ってきて「やめなさい！Aはどうしてそんなにいじわるなの！」と大声で叱った。

母親が無理やり取り上げようとしても、Aちゃんはフライパンからなかなか手を離そうとしないので、私は二人の間に入って「Bちゃんは、今フライパンを使っているんやね。Aちゃんも使いたいんやね」と二人の思いを代弁して、落ち着かせようとした。「Bちゃんがフライパンでいっぱい遊んだら、Aちゃんに貸してあげようか」と言うと、Bちゃんはしばらく遊んだ後で、Aちゃんにフライパンを貸して自分はお鍋に食材を入れて、遊び始めた。

Aちゃんの母親は、Bちゃんの母親に対して「横取りして、すいません」とあやまった。Bちゃんの母親は「うちの子は、執着心がないタイプで、それはそれで悩みなんですよ」と言って、この場を収めてくれた。

エピソード2

消しゴムはんこ作りの講師は年中児のお母さんで、1歳頃から自園の遊びの場に参加し、私とは思いが通じ合える間柄だった。

自我がしっかり出てくる2歳の頃は、保育園の子どもも含め、おもちゃの取り合いや、自分がしたいことをつらぬき通そうと、怒ったり、泣いたりして、親にとってもとても扱いにくく、子育てに悩む母親が多くなってくる。そんな母親たちの気持ちを受け止めてきたが日々対応に悩んでいた。そんな時、子育て経験のある講師のお母さんに自分の経験を少し紹介してほしいと思い、「Cちゃんは2歳頃、どうでしたか？」と話題を投げかけてみた。講師の母親は私の思いをすぐに察してくれたようで「あの頃はどこに行ってもおもちゃの取り合いで本当に疲れてしまいました」。すると他の母親も「自我の芽生えて言われるけど、どう子どもと付き合ったらいいのか、分からなかったです」などの意見が出てきた。

Aちゃんの母親が「何歳くらいから治まりましたか？」と質問すると、「言葉で伝えられるようになったらかなり落ち着いてきました」、「『貸して』『ちょうだい』などの分かりやすい言葉を教えるようにしました」と講師や他の母親たちのアドバイスに、Aちゃんの母親は少しほっとした表情をしていた。

母親たちがそんな話をしているそばで、子どもたちはそれぞれが自分の好きな遊びをして

いたが、Bちゃんが薄いソフトブロックの上でピョンピョンと跳び始めると、それを見たAちゃんや他の子どもも笑いながらいっしょに跳んで遊びだした。

私もいっしょになって「うさぎさんみたいやね」と両手を耳にして「ピョンピョンピョン、ピョンピョンピョン」と笑いながら遊ぶと子どもたちも何度も跳んで遊んだ。子どもたちが笑顔でいっしょにうさぎになって、跳んで遊んでいることが周囲の親たちの笑顔につながり、みんなの消しゴムはんこもなかなかの出来栄えだったという満足感とともに、温かい雰囲気包まれた。

(3) 考察

Aちゃんがかawaii、だからしっかりと育てたいという母親の思いが、時には厳しくなってしまうということをまず保育者自身がしっかりと受け止め、子育ての悩みを聞いたり、時には保育者自身の子育ての失敗談などを話しかかわってきた。またAちゃんのお兄への優しさや他児や保育者との会話の楽しさなどを母親に話し、Aちゃんのかawaiiさを伝えるようにし、Aちゃんの思いを母親が受け止めることができるよう今後もかかわっていききたいと思う。

また、消しゴムはんこ作りの時のように、講師や参加した人たちから色々な話を聞き、自分も悩みを相談できたというような経験を通して、子育てが分からない、思い通りにいかない、イライラするのは自分一人ではなく、みんな一緒だということを感じ、お互い確かめ合うことができた。それによって互いに安心することができた、そこから「大丈夫、やっていける」という自己肯定感が立ち上がってくると考える。だから、このような子育て支援を今後も大事なポイントとして実施していきたい。

母親はできれば資格を活かして就労したいと希望している。どのような勤務体制になるかはまだ思案中らしいが、家の近くの保育園(所)を紹介したり、自園の一時保育を案内するなど子育てを応援していきたい。また今後も親同士、子ども同士のかかわり合いが深められるような遊びの場を設け、親の思い、子どもの思いを受け止めることのできる子育て支援に取り組んでいきたい。

(エピソード討議内容)



アドバイザー



この親子は最初の利用の時から期間が開いて、その後は週2～3回来ているようだが、その背景には何があるのだろうか。

児童館のイベントに参加した時、自分の子どもはそこに入らない。“できる子”なのに周りの雰囲気に圧倒されて入らない。どこに行ってもそういう状況になり居場所がない。そのことから自園に戻って来て週に2～3回のペースで利用されるようになった。

F 子育て
支援担当
保育者



そのことがあって園を利用するようになったのだろうか。

イベントはあるけれど、したい人がすればいい。外で遊びたい人は遊んでもいい。子どものやりたいことをやるのが一番で、母親には子どものそんな気持ちを受け止めて見守ることを伝えている。そういうところでお母さんも参加しやすくなったのだろう。

F子育て
支援担当
保育者

メンバー1

「消しゴムはんこ」の教室では、大人が、子どもを真ん中に置いて、子どもの視点で会話を弾ませているのを感じる。利用者に対してこちらが一生懸命話をするのを優先してしまい、お母さんは聞くだけに終わることも多い中、この園では支援の場に来ていたお母さん同士のつながりを感じる。

私たち支援者がアドバイスするよりもお母さん同士の会話の中から気付くことが多いということがわかった。自分の意見としてアドバイスするのではなく、他のお母さんに意見を聞くことで「こんな話もありますよ」など提案することについてもこどもみらい館のほっこり子育てひろばの見学を通して学んだ。

F子育て
支援担当
保育者

お母さんにも自己肯定感を持ってもらうことを大事にしている。無理強いしてはいけませんがやる気のある方々が多く、依頼に対して「待ってました」というような反応で意欲的に取り組んでくれる。ボランティアとして実施していただき、生き生きとしてこれ子どもへのかかわり方も変わってきたと感じる。

F子育て
支援担当
保育者

メンバー2

経験談の中でこんなこともあるなど上から目線で話すのではなく、子育ての失敗談を話すというところがいい。そういう姿勢は大事だと感じた。

このお母さんが子どもを注意することもよくある。

F子育て
支援担当
保育者

メンバー3

自分も2歳児クラスを持っていてこのようなことはよくあることで、言葉よりも先に手が出てしまうことも多く、お迎えの際に親に状況を説明するが、お母さんは「してしまった」「された」「なんでけんかをするのか」という気持ちがある。今はそれが自然な姿なのだが、「何故友達と仲良くできないのか」「我が子は何故いつもこんなんだろう」と思うお母さんも多い。そこでは、お母さんの思いも受け止めながら、今の子どもたちの姿としてあるということを伝えながら対応している。

メンバー4

親同士のかかわりの中で支援者が、他のお母さんから子どもの小さいときの話を引き出すことで、Aちゃんのお母さんも「自分の子どもだけじゃないんだ」という安心感につながったのだと思う。親同士でも知らない間に支え合っていると感じた。そのように親同士をつなげていることが凄いことであるし、そんな雰囲気を居心地がよいと感じたAちゃん親子も、遠くても週に2～3回も来るようになったのではないかな。

メンバー5

この園は、支援の場の雰囲気の中でみんなが気持ちよく過ごせるような状況を作ろうという雰囲気があることが感じられる。まだ関係が出来上がっていない所では、このような状況の時にとげとげしい雰囲気になると思う。周りの雰囲気もお母さんの気持ちを変えていく大きな要因になったのだと思う。

今でもおもちゃの取り合いはあるが、園に来ることが続く中で「みんな一緒なんです」と言われ、お母さんも少しずつ変わってこられた。Aちゃんは言葉が出てきて、水遊びを楽しんでいるときも欲しいおもちゃを「かして」と言えるようになった。Aちゃんは、大きい子どもに興味があり自分からかかわりに行くこともある。その姿を見てお母さんも安心され、笑顔も増えてきた。

F 子育て
支援担当
保育者



AちゃんとBちゃんへのかかわりの際に、受け止める言葉があるのはとても良かった。ここで子どもたちがどんな表情だったのかがもう少し描かれているのもっとよい。先生が二人の気持ちを受け止める言葉を返したことが、周りの親の発言を呼び、それがお母さんたちを支えることにつながっていったと思う。もちろん信頼関係ができていることもあるが、保育者が作り出している雰囲気がある。先生がキーマンであり、先生の子どもたちへのかかわりを見ながら、お母さんたちも先生の意図を汲み取っている雰囲気がある。お母さんが以前働いていたときのことをうまく聞き出しているなど、サラッと書かれている内容だが、それができるといことが素晴らしい。先生の人柄や温かさによって、親の素直な思いが引き出されてくるような、そんなかかわりができていると感じる内容であったと思う。

【エピソード討議での気づきと学び】

- エピソード討議は初めてなので、積極的な意見は出なかったが、大倉先生や事務局が記述者へ質問していく中で、少しずつ討議の視点が見え、「母親の心」「子どもの心」からの視点で見ようとするようになった。
- おもちゃの取り合いになった時、支援者の言葉のかけ方で子どもも、その親も救われ、周りの保護者の雰囲気も和やかなものになったという内容から、子どもや親の気持ちに寄り添った対応がエピソードを通してメンバーの中に温かい空気と共に伝わった。
- 子どもにちゃんとしてほしいという母親の思いから子どもに対して厳しくなることの原因がどこから来るのかということについて、記述者の説明やメンバーの討議から見えてきた。このような気持ちを抱えて子育てをしている母親がたくさんいること、その母親たちの気持ちをどのように受け止めていくかについて、F支援者のような柔軟な対応ができているか、自分自身の対応を振り返る機会になった。

5 中間報告会から研究を振り返り見えてきたこと

それぞれの園(所)での取組や、京都市のニーズ調査から見えてきたものの話し合いを積み重ね、また、実際の子育て支援の現場や関係機関を視察し、現場の職員と意見交換をすることで、なんとなく大事だと感じていたことを、自分の目で見てその意味を実感し、肌で感じ、気づきにつながっていったのではないかと考えます。

研究が進んでいくと同時に研究メンバーの園(所)ではアイデアを出し、少しずつ子育て支援の体制を作っていくなど努力を始めているところも見られるようになってきました。

親子の、「心を育てる」「受け止める」を園(所)全体、職員全体にどのように伝えていくかが今後の課題であると考えています。何かを与えるだけの支援ではなく親の持っている力を引き出すことや自己肯定感を持たない親が自己肯定感を持ち、主体的に子育てできるよう共に考えていくことが大事ではないかと考えました。

(1) 大倉得史研究アドバイザーから

- 子育て支援の場において悩みを気軽に相談できることと同時に、保護者が評価的な眼差しにさらされたと感じないような配慮が重要であり、安易にアドバイスしない。
- 個々の保護者特有の「しんどさ」、保護者を一人の人間としてより深く理解するための枠組み作りと、そのために必要な関係性構築のための方法論の蓄積が、保育の現場における子育て支援の第一歩ではないだろうか。

多様な価値観、様々なライフスタイルで子育てが行われている現代社会において、子育て支援の中身は一樣ではありえない。保育の場においても、園によって、あるいはクラスによって、目にする親子の姿は異なるし、必要となるかわりも異なってくる。そうした状況の中で、子育て支援のための何らかの見通しを立てていこうとする当研究プロジェクトにおいて、保育園(所)、幼稚園から色々な立場にある保育者が集まって、まずは「何故、子育て支援をしなければならないのか」について率直に意見を出し合うところから始め、各関係機関を実地に見学して回ったというのは必要かつ有意義なことであつたと思われる。例えば、園庭開放や拠点事業、「つどいの広場」などが用意している「ほっこりできる居場所」の必要性や、幼稚園にしばしば見られる保護者間の人間関係の難しさ、不幸にも虐待に至ってしまう保護者の生活背景や必要な心理的サポートなどについて広く見聞を深めたことは、メンバー各自の子育て観、社会観を豊かにするための大きな糧となつたのではないか。こうした情報を各園(所)に持ち帰って、他の職員と共有することだけでも大きな意義があると思われるが、それに留まらず、今後さらに積極的に、これらの知識を各保育者の日頃の取組に活かしていくためには、今一度、現代の保護者が一般的にどんな「しんどさ」を抱えているのかを整理しておく必要がある。

一つ目のキーワードはやはり孤独であろう。核家族化が進んだ現代社会において、例えば母親一人が子どもの食事の世話からおむつ替え、入浴、寝かしつけまで全てをやり、その他の家事もこなさねばならないという家庭も多い。自分が別の仕事をしている間、少しの間だけ子どもを見ていてくれる誰かがいるかいなかで、母親にかかる心理的・身体的負担感は大きく変わってくるが、そうした人が身近に得られないケースがままある。

二つ目のキーワードは、保護者の自己肯定感の低さである。自分の子育ての仕方が果たしてこれで良いのかまずいのか、漠然とした不安を抱えたまま、インターネットや育児本を頼りに子育てをせざるを得ない人。あるいは、自分自身、幼い頃にきちんと親から向き合ってもらえなかったり、他者から思いを受け止めてもらった経験に乏しかったり、自信や他者への信頼感が持てない人。いろいろな要因が絡み合つて、子育ての悩みを誰かに相談したいような気分と、しかし相談したときに「それではダメ」といった評価を受けたらどうしようといった不安とが、今の保護者の中には混在している(したがって、子育て支援の場においても、「悩みを気軽に相談できること」と同時に、「保護者が評価的まなざしにさらされたと感じないような配慮」が重要である)。

これら二つの基本的要因とそれぞれの保護者が置かれた個別的事情(子どもの個性や障碍、保護者間の人間関係、経済的困窮、一人親としての忙しさ、病気等)が絡み合うところに、個々の保護者特有の「しんどさ」が立ち現れると見てはどうだろうか。別の言い方をすれば、一人の保護者を理解しようとするときに、その人が現在どのような人間関係の網の目の中に置かれているかという関係性の視点と、その人がこれまでどんな暮らしを送ってきた、これからどんな人生を送っていこうとしているかという歴史性の視点とを絡めながら見ていくということでもある。保護者を一人の人間としてより深く理

解するための枠組み作りと、そのために必要な関係性構築のための方法論の蓄積が、保育の場における子育て支援の第一歩ではないかと考えられる。

(2) 鯨岡峻スーパーバイザーから

- 人間は自分の存在が認められた時にグッと嬉しい気持ちになる。その嬉しくなる瞬間こそ自己肯定感が立ち上がるときである。
- お母さん方の存在を本気で肯定していけるかどうか、懐深い支援ができているかどうか、支援者として問われるところである。

発表の中に自己肯定感という言葉がたくさん出てきた。自己肯定感はずごく使いにくい言葉だと思う。私は最近「自己肯定感が立ち上がる」という表現をするようになった。幼い頃、自分の存在が認められたときに、自分の中に“自分は大事なんだ”というように自己肯定感の根っこができあがるが、それが学校教育の中や様々な社会の中で、マイナスの経験に出会い、それを溜め込むことによって、乳幼児期に形作られた自己肯定感が氷り付けにされていく。それが、自己肯定感がない、自己肯定感を持っていないといわれる状態になっていくのではないかと。人間は自分の存在が認められたと分かったときにグッと嬉しい気持ちになる。その嬉しくなる瞬間こそ自己肯定感が立ち上がるときである。自己肯定感という言葉はこういう形でしか使えないのではないかと。「あるのかなのか」といわれれば「ある」のだろうが、それが「ある」というように自覚できるものでもない。しかし、何かの折に自分の存在が認められると何か内側から嬉しさが込み上げてくる。この嬉しくなる瞬間が自己肯定感が立ち上がる瞬間である。そして保護者は今このように自己肯定感が立ち上がる瞬間に出会えない生活を余儀なくされている。だから今、子育て支援などの場面で、自分の存在を周りから肯定されている、認められていることが分かったときに、日々の厳しい生活の中で氷り付けにされていた自己肯定感が立ち上がってくるのではないかと。そういうことを通して保護者に少し元気が出てくることが、まず子育て支援の場で大事なことはないかと思う。それはまた子育て支援を担う側がどれほど懐深くお母さん方の存在を本気で肯定していけるかに懸っている。「それぐらい自分でやれば」「誰だってそれくらい我慢しているんじゃない」という思いを支援する側が少しでも持っている、それは表情や態度に溢れ出てしまい、お母さんたちに伝わってしまう。それは子育て支援にならない。したがって、どれだけ本気で「お母さん本当に大変ですね」「一生懸命がんばっていますね」というようにお母さんの存在を心から肯定するような、懐深い受け止め方ができるかどうか、支援者としては一番問われるところかと思う。

今、子育て支援はどんどん広がり、家に閉じこもって子育てしている保護者に対して、保健師に保育者が同行して家庭訪問し、母親の悩みを聞くという新しい子育て支援の形さえ生まれてきている。本当は子育て支援を必要としているのに、子育て支援の場に出てくる力のない人にどのように支援していけばいいのか、そこまで踏み込んで子育て支援について考えようとしていることはすごいことだと思う。今後のこの研究がそういうことを含め広がっていけばよいと思う。

6 研究の再考

(1) アドバイスを受け研究を再考したこと

親子の心に目を向けた子育て支援の研究を更に深めるために、「今の保護者の抱えるしんどさ」を対応事例、エピソード記述の検討、ほっこり子育てひろばのアンケートから学びました。そして、対応のあり方を考え、保護者との関係構築のための工夫について研究を進めることとしました。

昨年度に引き続き、子育て支援の意味と、「心」を大事に考えることについて学ぶために研究アドバイザーである大倉得史先生の共同機構研修を受講しました。

テーマ「主体としての心を育てる保育～今、大切にしたい保育の質～」大倉得史さん
【研修を受けての学び】

① 心を育てることの意味、心を大切に考える子育て支援とは

- ・ 子どもたちの「今」の思いを感じ、子どもの訴えに耳を傾け、今の生活が充実し、次へと向かう自信につながるよう常にその声が聞こえる自分でありたい。
- ・ 子どもはもともと、大人の思い通りになるものではない。完全に理解することはできない“他者”である。
- ・ 子どもは大人の予想を裏切り変化していく存在である。
- ・ 子どもは大人の従属物として存在するのではなく、同世代を生きるパートナーである。
- ・ その子が何を楽しいと感じているのかを知っていこうとすることが大切である。
- ・ 自分なりの思いを持ち、たった一つの人生を歩んでいる存在である。
- ・ 子どもを安易に理解した気になることと、気持ちに寄り添って鷹揚に構えることを一緒にしない。
- ・ 「行動」ではなく、「思い」に目を向ける。
- ・ 子どもと同じ視点から一緒に子どもの「思い」を味わってみる。
- ・ 保育者の枠組みを揺さぶられ悩むこと、迷うことを恐れない。
- ・ 親子の気持ちに寄り添い、「今」を大切にできているかを常に自分に問いかける。
- ・ 子どもたちが、例えば10年後、将来に不安を感じたり、自分に自信が持てない、という思いにならないよう、子どもの心に寄り添った保育をしていく。
- ・ 日常の保育のなかで「接面」に気付く、または作り出すことを大事にしていく。

② 保育園(所)・幼稚園に求められる支援とは

- ・ 心の中に芽生えた力は次の力につながるということや、子どもの思いに目を向ける大切さをいかに親に伝えていくか。
- ・ 子どもと保育者がお互いの主体性を尊重し合い、共に生活を営む場となる。
- ・ 親子を主体として受け止める支援をしていく。
- ・ 子どもと保育者の「接面」で起こった子どもの心の成長を親に伝えることで、親の子育ての喜びになる。

- ・ 保育者と保護者の「接面」を作り、保護者の心に寄り添い、「懐深く」保護者を丸ごと受け止める。
- ・ まずは“あたたかく、なつかしい”雰囲気にも包まれた空間（人的なものも含めた）を作っていく。
- ・ 園（所）で親が様々な“子どもとのかかわりの場面”を見ることがよきモデルとなり大切なことである。
- ・ “共に生きるパートナー”であると感じられるように心を通いかわす活動や、遊びの場を作っていく。
- ・ 個々の姿をしっかり見つめ、その子なりの表現や行動を大切に受け止め、そのことを保護者に伝え、その子らしさや、その子の思いを共有していく。

(2) その後のエピソード討議

「心に目を向ける子育て支援」に視点を置いてエピソードを記述しました。

エピソード：その2

このエピソードでは、2人の子どもの子育てに悩む母親に対して、安易に母親の気持ちを理解したような言葉かけをしたということから、保護者の気持ちに寄り添うことの意味について考える内容です。

エピソード

保育園 G保育者

1 テーマの捉え方

子育て支援研究プロジェクトでは心を大切に考える子育て支援のあり方を学んできた。その中で大倉先生から、しっかり一人ひとりに無心で寄り添うことが子どもや親を「変える」のではなく「自ら変わっていく」のを支えていくような優しいかかわりになるのではとアドバイスを頂いた。まだまだその難しさを感じながらも人とかわるなかで私に欠けていた、相手を大切に思うことを意識してきた。

副主任、フリーという立場になり二年目、園全体の事務的な仕事に携わり仕事を消化していくだけで精一杯で私自身が時間にも気持ちにも余裕がなく過ごしているが、せっかくの子ども心の育ちを、機会を逸することなく親に伝えることを課題としてきた。日々子どもの素敵さを実感しているこの嬉しさを親と分かち合い、安心して相談してもらえる相手となるよう努めたい。

2 エピソード記述 「みんなそう言ってくれはるんですけど・・・」

(1) 背景

当園で一時保育を始めて4年、預けたい理由は同年齢の子どもと遊ばせたい・美容院や病院に行きたいというものから仕事をしたい・ハンディを持っているので健常児と過ごさせてあげたい・母親の入院など、切羽詰ったものも増えている。また、受け入れ後子どもの発達や親のかかわりが気になることも多々ある。

D君（男児現在2歳3か月）は1歳8か月の時に一時保育の登録をした。当時お母さんは弟のE君（当時9か月・男児）を抱っこしてD君をベビーカーに乗せ来園。見るからに大変そうだった。

お母さんが寝入っているE君を抱っこしながら二人分の登録書類を書いている間、私がD君と遊んで待つことにする。用意していたカエルのおもちゃを跳ばしたり並べたり積んだりして見せると笑顔は見せないもののD君は“もう一回”とばかりに私にカエルを渡す。しばらく遊ぶと、人見知りもなくD君は私の手を引いて職員室から出たいとアピールしたので一緒に園内を探索する。

お母さんが書類を書き終える頃を見計らって私が「Dちゃん、お母さんのところに帰ろうか？」と手を出して誘うと一旦私の顔を見て嫌がることもなく手をつないで職員室に戻った。この間、D君から言葉や声は聞かれず表情も乏しかったので少し気にはなった。

（2）エピソード

登録の際お母さんは遠慮がちに受け答えされていたが、帰り際になって「怒ってばかりなんです。Dはやって欲しくないことばかりして……怒ってばかりではあかんて分かってるんやけど……」と吐露された。「たとえばどんなことですか？」私は具体的に聞けば一緒に何か気付くこともあろうかと尋ねてみた。「ご飯のとき、お茶をわざとひっくり返したり……」と答えられたので「わざと？」、「こっちを見てしているの」。お母さんの気持ちを少しでも和ませたくて「わざとですね」とお母さんに賛同するように笑って言う。D君の思いを探ろうと「お母さんの気を引きたいのかなあ…」と言うと「年子なのでそれはあるかもしれません」とお母さん。「まだまだ甘えたい時期ですものね。でもお母さんが大変ですよ？年子は小さいうちは大変やけど大きくなったら逆に楽って聞きますけど」。「みんなそう言ってくれはるんですけど……」と“今までにも同じことを言われたことがあるけれど（私は今どうにかして欲しいのだ！）」と言うお母さんの気持ちがひしひしと伝わり、「ねー、今が大変なんやもんね」と受け止めるしかなかった。

「怒らないほうがいいですよ」。再度保育者としての私に確かめるように聞かれた。「うーん、危ないこととかお母さんがこれとは思わはることは言わはったらいいと思いますよ」。少しほっとした表情をされたので続けて「保育園でもしたらあかんことは小さくても『メンメ』とか『ブー』とか『アーアー』って分かり易い言葉で言うてますねえ。くり返しくり返しですけど…それと、止めてばかりやったらこっちもしんどいから、やめて欲しいことじゃなくて、して欲しいことに言いかえるのも一つの方法かも…」と言うと、お母さんはすぐに『ひっくり返さないで』じゃなくて『コップ置いといてね』とか？」と肯定的な言い方を考え付かれた。私が感心して「お母さん上手じゃないですか。そんな感じ！」と言うと、「こんなんでもいいんですか？」とにっこりされた。気真面目そうなお母さんだけに「～しなれば」になって逆に又、しんどい思いをされるのでは？とも感じたので「いつもいつもじゃなくても5回に1回くらいでも……」と付け加えると「家でもやってみます」と表情もやわらかに帰られた。

4月に弟のE君は0歳児、D君は1才児クラスに入園した。園生活に慣れてきた頃から、D君なりの理由があるものともだちを咄嗟に噛んだり押したりすることが増えてきた。またすぐに保育室から出て行ったりと落ち着かない様子だった。お母さんは弟の担任に「Dは可愛くない」と悩みを打ち明けられた。D君の担任には自分の子育ての仕方が上手くないからだと自分を責められることもあった。両方の担任より親子の様子を聞き、年子のせいだけではなくD君の育てにくさを担任も私も感じたので、主任とも相談し、発達相談があることをお母さんに話してみる。「是非、受けてみたい」と前向きに考えられ、D君が発達テストを受け、後日、両親そろって発達相談を受けられた。

テストを実施された発達心理の先生から、“知的な遅れはないが感覚が鋭敏で、何か刺激があるとすぐにそちらへ注意がいつてしまう特徴がみられること。その特徴を分かってあげながら、例えばD君が物を投げたら叱るのではなく、知らんふりをしたり場面を変えたりして、どうすればD君が落ち着けるか考えながら子育てをしていくといい”というアドバイスを受けた。その後休みの日にお父さんが弟をみてお母さんがD君との時間を持つなど、家族の協力も得ながらD君を大切にかかわっておられる。

また、私が代替に入った際、連絡帳に“E(弟)を噛もうとすることもあったのですが、一度噛みかけたのをやめて叩いてしまったものの「イヤー！」と言った。少しその気持ちは抑えられたのかもしれませんが。最近噛んだら、「嫌なときは『イヤー!』と言うんだよ」と伝えるようにしていて、少しは伝わったのかなと思いました。気のせいかもしれませんが…”とお家での出来事を書かれていたので、嬉しく感じ、その日のお迎え時、「D君の行動でなく気持ちに目を向けられたお母さん素敵です」と話す。「そんなことないです」と謙遜するお母さんに「今日ね、園でも友達におもちゃを持って行かれそうになったとき一瞬噛みそうになったけどやめて自分から“かして”のポーズをして返してもらったんですよ。お母さんがD君の気持ちわかってあげてはるのD君に届いてますよ」と話すと「それやったら嬉しいです」と喜ばれる。

そんなお母さんを見て「今までD君を育てはるの一筋縄ではいかへんかったでしょうね」と私が思わず言うと、「そうなんです。おっぱいもあんまり飲まへんかったし夜も寝えへんかったし…」と赤ちゃんの頃から育てにくさを感じられていたことを話してくださった。

「そうやったんですね…頑張ってきたんやね…これからも嬉しかったり大変やったりの繰り返しやろうけど、しんどい時は担任でも私でも言うて下さいね。愚痴でも聞きますから」と笑いかけると「ありがとうございます」と笑い返して下さった。

(3) 考察

一時保育の登録の際、私は「お母さんの気を引きたいのかなあ」とD君が年子故にお母さんに甘えられず葛藤していることでお母さんがしんどい思いをされているのでは、と勝手な憶測をしてお母さんと話していた。

大倉先生の研修で“子どもを安易に理解した気になることと気持ちに寄り添って鷹揚に構えることを一緒にくたにしない”と教えていただいたが、こういうことだったのでは?と気付かされた。この時私はまだD君もD君のお母さんも主体としてみなせていなかった。

発達相談後D君の心の育ちをお母さんと喜び合え、それまでのお母さんの大変さに心から寄り添えたからこそ赤ちゃんの頃かしんどかったことを話していただけたのではないだろうか。

気持ちに寄り添うためには子どもの、そしてお母さんの状況や思いを知ってその身になること。知るためには思い込みや決めつけを取っ払って話を聴くことに尽きる。特に一時保育や子育てひろばに来られる方は胸の内をすぐには話しづらいだろうが、それでもお母さんの言葉の端々からその思いを伺い気持ちに寄り添うことはできるはずである。今回も、「みんなそう言ってくれはるんですけど…」というお母さんの言葉に、自分が安易に気休めの言葉をかけてしまっていたことに気付かされた。研修や研究プロジェクト等で学んだことを実際の親子とのかかわりで改めて教えてもらっていることを実感する。

また今回、発達相談を利用させていただきD君自身に育てにくさがあることが分かった。「自分の子育てがまずいのでは」と自分を責めることもあったお母さんの気持ちが少しでも楽になったのではないだろうか。担任だけ、保育園だけで抱え込まないことも大切なことであると思う。そのためにも日頃から親子のエピソードを職員間で共有することをこれからも園の基盤にしていきたい。

【エピソード討議からの気付きと学び】

- 発達面で気になるD児と2人の子どもの子育てで悩んでいるD児の母親に対して、“今が大変なんだ”という母親の気持ちを受け止め、D児へのかかわり方を具体的に伝え、子育てに悩む母親に何かよい方法はないかというようなかかわりで、発達相談を勧めてみるなど、保育者のかかわりと園全体の支援に対する方向性を見通しを立てることの重要性を学んだ。
- 母親の気持ちにどうすれば近づけるか、ということに一生懸命取り組んだことで母親も「子育ての大変さやしんどさを正直に話してくれるようになった」など常に気持ちに寄り添っていくことが、D児や母親の理解につながったことを学んだ。

(3) 本研究におけるエピソード記述、エピソード討議を通しての気付きと学び

エピソード記述では、1年目は「親育ち」「子育て」をテーマに同じ親子を追って、メンバーそれぞれが2つのエピソードを記述し、2年目には、「心を大事に考える」ことを中心に親について、子どもについてのエピソードを討議し、保育や支援のあり方について検討してきました。2年にわたるエピソード記述と、エピソード討議を通して以下のような様々な気付きと学びがありました。

【エピソード討議を通しての気づきと学び】

- ◆ 子どもとの「接面」を作っていくことの大事さ、子どもや親の心の揺れを感じ、何故その気持ちに傾いたか、何故その気持ちの動きを感じたかなど、支援のプロセスを大事にすること。そして、どのような行動に対してもまずは受け止めることに気づき、そこから次へ向かう気持ちへと導くことを学びました。また、それぞれの子育て支援の場の役割も含め、親それぞれの思いをどれだけ丁寧に汲み取り、その思いに寄り添った支援ができているかについて考えるきっかけになりました。
- ◆ 発達面で気になる子どもへの対応の中で、支援者の持つ温かい雰囲気、関係性、ほっこりとした空間があることが大切である。受け止めてもらったことで安心し、その子の心が育ち、その子の世界観を広げることにつながり、そして、その子の持つ世界観を親と共有していけることの大切さを学びました。
- ◆ 虐待を受けている子どもの行動に対して、その子の気持ちを引き出していくかかわりをしていくことの大切さについて学びました。そして、親の気持ちにどうすれば近づけるかということに一生懸命取り組んだことで母親も「子育ての大変さやしんどさを正直に話してくれるようになった」など常に気持ちに寄り添っていくことが、母親の理解につながったということを知りました。

そして…

保育者や園(所)の温かい雰囲気を感じることで、言葉で伝えるのではなく、

保育者の

懐深い受け止め

かかわりの大切さ

について気づき、学ぶことができました。

再考後の研究 1

「今の親の抱えるしんどさ」とは何なのかを考える

現状として

- * 人間関係の希薄化、コミュニケーション力が低下している。
- * 核家族化、高齢出産で祖父母の介護が必要である。
- * 周囲に頼れる人がいない等の様々な理由で精神的・身体的健康を崩している。
- * 子どもの障害や他児とのかかわりに悩みを持っている、不安定な環境等、多面的で重なり合っていることが多い。
- * 昼間、子どもと一対一で過ごしている。
- * 母親自身が小さい頃に思いを受け止めてもらった経験がないため、他者との信頼関係が十分でなく、子育ての悩みを相談できず、ネットや専門書で自分なりに解決するしかない。

などがあります。

しかし・・・ネットの情報は多様であり更に「不安」につながるケースもあります。

子育ての悩みについて相談したいけれど、相談することで自分の子育てが間違っていると言われないか、また、**子育てに向き合えない自分は“ダメなんだ”**など自分で自分を受け入れられない辛さがあります。

視察や現場の声、エピソード討議、個別訪問の支援の方法などを聞き、様々な保護者がいることを知りました。そして、各園所の保護者の姿では、

みんなと一緒にできることに安心し、できないことについて悩む

保護者の姿や、仕事がハードで時間の余裕がない、夫の理解が得られないなど今の保護者の抱える不安や悩みについて討議を行ってきました。

【悩みや不安を抱える保護者に対して】

- ◆ 保護者のしんどさをイメージし、子育ての大変さや悩みを受け止め共感する。
 - ◆ 保護者が「今何を求めているのか」、「どのような状態なのか」できるだけ早く、正確に見極めることが大切である。
- このことを理解した上で保護者との関係作りが必要になってくる。

ということを話し合いました。

「子どもを共に育む『親支援』プログラムほっこり子育てひろばのアンケートから保護者のしんどさを考える」

このプログラムに参加して、他の母親たちと悩みを話し合うなかで気付いたことの中には、**「自分の気持ちや相手の気持ちに共感し合う」**また、**「人の子育てが参考になった」**など、支援者から教えられるのではなく、**「自分自身で気付いた」**ことなどの記載があり、今後の子育てに対して前向きになり、気持ちが楽になっていることが伺えます。

このように・・・

それぞれの保護者に悩みや不安はあるけれど、それを一人で抱え込まずに人に話すこと、人の子育ての悩みを聞くことで**「自分だけではないんだ」**という安心感や悩みの軽減につながるものが伺えます。それは、保育園(所)・幼稚園で自分の担任に悩みを相談することとはまた別に、現在子育てをして共に生きている者同士で共感し合えるところからくるのではないかと思います。

そこで私たちは

- ◆ 保護者同士が気軽に集い、話合える場を提供していくことと、そこに行き着くまでの保護者に対して、参加しやすい雰囲気や、保護者同士をつなげる雰囲気作りが求められています。
- ◆ 時には保護者同士がつながることを押し付けず、様々な保護者の状況をしっかり把握し、個別対応が望ましい場合などが判断できるよう、その場の雰囲気を作ること
も支援の環境の一つとして捉えていくことが必要になります。

ということなどを話し合いました。

[園庭開放を利用する親には]

登録や面談など基本的な枠組み作りを行い、それぞれの様子を観察、声をかけるタイミングや保護者同士がつながるような雰囲気作りを大切にしています。また、様々な子育て支援の場の紹介の際にも、保護者が自分で選べるように後押しをすることで保護者の安心につながります。施設全体で、支援が行っていきけるよう、園庭開放、施設長との面談、親子半日保育体験など、職員との関係も広げてもらい、親子をみんなでサポートしています。

[地域子育て支援拠点担当者としては]

家庭訪問後の報告、相談、記録（支援目標・支援内容）を大切にしています。初めから受け入れてもらおうということを思わず、訪問を重ねることで徐々に受け入れてもらえればよいというように考え“押し過ぎず無理なく”ということに気を付けています。

また、保護者の中に答えがあり、その気持ちを押ししてほしいという思いを察する場合には、一つの方向からいくと保護者の逃げ場もなくなるので、いろいろな糸口から方法を考えています。関係ができてくると、提案に対しても拒むことがなくなる場合もあり、やはり、関係性の大切さがあります。

そして、親子の声を聞き、それを振り返り、次の訪問に活かしていけるよう取り組んできました。また、保護者のその時々状態を把握し、細やかな配慮と柔軟な対応を心がけているということです。

各園(所)がそれぞれに保護者との関係作りのために行っていることを報告し合い、自園(所)を振り返り、今後活かしていけることはないかなど各メンバーの気づきになりました。

再考後の研究2

【対応事例検討と関係構築の方法について】

それぞれの園(所)において様々な保護者の姿がある中、その対応について職員で考え、対応していますが、果たしてその対応でよかったのか？自園(所)だけで考えるのではなく、研究メンバーの体験や、考えを聞き今後活かしていくことを目的に、対応事例検討をしました。

事例の検討

- * 子どもが集団生活になじめずに登園できない
- * 子ども同士のトラブルや怪我について
- * 保護者同士のトラブルについて
- * 子どもにとってのクラス編成と親の思い
- * 家庭訪問事業での親の不安に対して

【対応事例を通して関係構築の方法を考える】

- ◆ 保護者の相談に対して「いつでも話を聴きますよ」という姿勢でいる。
- ◆ 話してくれたことに感謝の気持ちを伝える。
- ◆ 相談内容はその後全職員で共通理解する。
- ◆ 保育園(所)では保護者同士が顔を合わせることが少ない分、トラブルなどが起こった後の対応について両者に対してしっかりと行い、“任せて大丈夫”という安心できる関係を築いていくこと。
- ◆ 幼稚園では、送迎時などに顔を合わすことも考慮し、相談を受ける際、場所や時間、タイミングについて個々への細やかな配慮をする。
- ◆ 保護者の関係修復はなるべく早い段階でできるよう個々の対応を丁寧にしていく。
- ◆ 保護者間で情報が先回りし、トラブルや不安にならないよう子どもの状況を把握し、速やかに職員間で連携し、お迎えの際に伝えられるようにする。
- ◆ 保護者の悩みに対しては、答えを出すのではなくまずは話を聴き、その保護者が選べるようにいくつかの選択肢があることを伝える。また、相談内容を整理し、必要に応じて書いて情報を提供する。
- ◆ 自己満足に留まらない支援、その親子のこれからの人生も含めて共に考えていく。
- ◆ 自身が支援をしたことで、親子自らが変わる姿に喜びを感じることが保育者自身の自己肯定感につながることもある。そこで自己満足に終わるのではなくその後の支援を意欲的に行う。

私たちがかわる保護者は、“一生涯子どもと付き合っていく”その内の一つの時間、通過点でしかない。その中で支援者はどれだけかわるか、つながるか、という視点が大切であり、とても大事な時間である親子のこれからの人生も含めて考え、自己満足にならない支援をしていくことの大切さを確認し合いました。

VII 研究の成果

第3期研究プロジェクトを立ち上げ、まずは、「何故、保育園(所)・幼稚園が子育て支援をしなければならないのか」ということについて本音で語り合うことから始めました。

当初の本音は、幼稚園の預かり保育の場合、保護者の都合で預かり保育を受けることに對して子どもの気持ちはどうなのかということや、保育園(所)で、一時保育をすることは体制的には大変であるが、利用をする親子は支援の必要な場合が多いという現状や本音を出し合いました。しかし、何故子育て支援をしなければならないのかという思いの本当の意味は、研究を進めていく上で、少しずつ明らかになってきました。

「子育て支援はイベントのようなものと思っていた」また「園長や主任がするものと思っていた」など担任としては子育て支援者としての意識が弱いメンバーもいました。そして、保護者の悩みに対しては、子どもが変わることで親の気持ちも変わる、また、子どもが何かできるようになることに力を注ぐことが、保護者の悩みの解決につながるという本音でした。

研究を進めていくうちにメンバーの子育て支援に対する気付きが生まれ、そして変容していきました。その内容については、後に記述している感想文を御覧ください。

子育て支援とは、地域の保護者を支えていくことを含め、保育園(所)・幼稚園の在園児の保護者に対しても同じ思いで寄り添うことが大切である。それは「今の保護者の抱えるしんどさ」を理解し、以下の項目について意識してかわることが重要であるということを共通認識しました。

- ◆ 保護者の抱える状況を正しくとらえ、すぐには表出しない保護者の心の叫びに親身になって耳を傾け、相手の思いを汲み取り丁寧な対応をする。
- ◆ 保護者や地域、職員が心を合わせ、同じ方向を向いて子どもの育ちを支える。
- ◆ 人の役に立てる機会を持つなど自己肯定感が持てるような支援を行うこと。
- ◆ 子どもの個性が認められ、どの子にとっても居心地のよい場所であること。
- ◆ 子どもの姿に不安を感じる保護者の気持ちを受け止め、子どもが園生活を楽しんでいることや、生き生きと生活することが嬉しいと感じる気持ちを大切にすることが、保育園(所)・幼稚園における「親子を支える子育て支援」につながるのではないかという深い学びと気付きを得ることができました。

また、

- ◆ 様々な子育ての悩みに支援者が答えを出すのではなく、保護者の気持ちをしっかり受け止め、子育てに気持ちが向かえるようにし、保護者自身が気付けるように導くことが大切である。
- ◆ エピソード記述や討議をすることで、子どもの心の「接面」をどう作っていくかを意識

するようになり、子どもも保護者も「受け止められる」「認められる」ことで、心が安定し次に向かう意欲につながる。そしてそこを支えていくのが、私たちの役割であるということを再確認しました。

「できる」「できない」という「させる保育」が子どもや保護者にどのような心の傷を与えているのかを考え、目に見えない「心」を感じ、親子の心にどう寄り添えるか「懐の深い支援」をすることの意味について実感できたことは大きな成果であると思います。

VIII 今後の課題

[保育園(所)・幼稚園における子育て支援として]

地域の親子を受け入れていくことを含め、保育園(所)・幼稚園の在園児の保護者に対して同じ思いで寄り添い、保育園(所)・幼稚園における安心・安全な環境の中での、場作り、地域への支援のあり方を考え実践することであると考えます。

そして、「今の保護者の抱えるしんどさ」を理解し、「親子の育ちを支える子育て支援」が根付くために、保護者とのつながりや、地域の関係機関とのつながりなど、ネットワークの構築があげられます。

[研究プロジェクトとして]

今期は3年間での研究を行ってきましたが、メンバーそれぞれが現場での保育を抱えながら、毎月の会合、視察、研修についてメンバー全員が参加することが難しく、十分な討議をすることができない部分もありました。

また、人事異動によりメンバーが変わることでは、研究の積み上げが難しいということもあります。

そして、研究内容をそれぞれのメンバーが各園(所)でどのように伝え、共通認識を図っていくかということについては課題があります。



IX 子育て支援研究プロジェクトに参加して (五十音順)

***** 伊藤 文 京都市聚楽保育所（市営保育所）*****

京都市全域の幼稚園，保育園(所)の先生方と子育て支援の情報を交換し，親子の思いについての話を深めていけることに感謝し，その学びの中で，「大切な子育て支援とは」を見つけていきたいと思い取り組んできました。幼稚園の先生方からは，今の親子の気持ちや寄り添っておられる先生方の気持ち，親子支援についての様子を教えていただき，今まで，親子の気持ちや悩みを，保育者の視点でしか考えていなかったことに気付きました。その親子の悩みは，地域の親子の悩みに通じることを知り，プロジェクトに参加するようになってから，様々な角度から，親子の気持ちを考えていこうと思いました。保育園の先生方が日々取り組んでおられる子育て支援の思いを聞く中で，「保育所で保育者が支える子育て支援の大切さをずっと心に持つ」ことの大切さを学びました。実践では，*聚楽保育所に見学に来ていただいた時，園庭開放に参加していた保護者が，見学に来られた先生の園児さんで，そのことがきっかけとなり，母親との話や関係が深まりました。*エピソード検討会では，大倉先生やメンバーからのアドバイスから，家庭訪問の中で，時には「親子に甘える」ことから生まれる支援に気づきました。その後，自然体の自分になることができ，ゆったりとした空気で訪問ができるようになりました。また，エピソード検討会后，支援機関の中で，子どもが集団に入れないことで，悩んでおられる親子の思いを受け止めながら，近隣の児童館と「親子の思いを受け止め，支える支援をどのように取り組み，他機関へ発信していくか」をテーマに月一回の会議が持てるようになりました。地域子育て支援拠点担当になって，初めての年にプロジェクトに参加できたことを幸せに感じています。プロジェクトでの学びを日々の実践に活かすことができ，これからもこの気付きを親子に丁寧に返していけるよう頑張っていきたいと思います。



***** 小寺 玉枝 京都市九条保育所（市営保育所） *****

研究プロジェクトへ参加し、こどもみらい館での「ほっこり子育てひろば」をはじめ、様々な支援の場を見学し、そこでの様子を実際に見たり支援者からの話を聞くことで一層具体的に子育て支援が必要なことや保護者が何を求めているかなど、研究プロジェクトのメンバーで討議することができました。地域における人間関係の希薄化や核家族化といった状況の中で保護者の孤独感、負担感、不安感などの「しんどさ」が増えてきていることを学びました。保護者自身も受け止められたい、認められたい、何か自分も出来ることを見出し役に立つ喜びや自己肯定感が持てるように、保護者の持っている力を引き出す支援の大切さも学びました。

大倉先生の研修を通じて「心に目を向けた子育て支援を考える」ことに視点をおき、保護者が子育てに喜びを感じられるようにしていくことが必要であると思います。そのためには、子どもとの「接面」や保護者との「接面」を作ることが大切であるということについてプロジェクト委員が共通理解できたことは素晴らしいことであると感じています。

エピソード記述検討会では、子どもの気持ちや親の思いを受け止め親の願いを丁寧に聞き柔らかに返すということに意識を持つことの大切さに気付くことができました。

自分の保育所でも研究プロジェクトの内容を報告することで「心の育ち」に目を向ける大切さや「保護者のかかわりの大切さ」ということに意識を持つことについての学びとなっています。

***** 佐々木 みほ ゆりかご保育園（民営保育園） *****

参加当初は、私自身の経験や当園の取組がこのプロジェクトに何か役立つことがあれば等という思いがありました。

研究を進めていく中で、又エピソードを記述することや読むことで、相手を大切に思うということが私には欠けていたことに気付かされました。その気付きがあったからこそしっかり一人ひとりに無心に寄り添うことが子ども保護者を「変える」のではなく「自ら変っていく」のを支えていくようなやさしいかかわりになるのではという大倉先生からいただいたアドバイスがストンと落ち、実際の親子とのかかわりを意識するようになりました。

研究プロジェクトで学んだことを「こういうことだったんだ」と実際の親子とのかかわりで改めて教えてもらっていることを実感しています。

まだまだ、気持ちが空振りして反省したり、自分のかかわりがこれでよかったのか？と悩んだり迷いながらではあります。しかし、保育者としての枠組みを揺さぶられ悩むこと、いったん揺れて「信じる」というプロセスを大事に、迷うことを恐れず、相手の気持ちを安易に理解した気になるのではなく気持ちに寄り添って想像してかかわることを実践し、子ども、保護者と共に私自身も成長したいと思います。

***** 高島 伊代子 稲荷保育園（民営保育園）*****

地域の子育て支援の場で、「子どもや保護者の思いを受け止め、保育者の思いを届ける支援」を課題にして支援を進めてきました。しかし、一人ひとりの親子の「思いを受け止める」ことができているのか悩むことがよくありました。

今回「親子の育ちを支える子育て支援」をテーマに研究する機会に恵まれ、幼稚園、保育園(所)の枠を越えて様々な支援の場での取組を見学したり、参加者全員が何度もエピソードを持ち寄り、エピソード検討会ができたことは私にとって大きな学びとなりました。

エピソード検討会では、子どもや保護者の行動や言葉などの目に見える部分だけでなく、「この子はどんな思いだったのだろう?」、「保護者の気持ちはどうだったんだろう?」ということ意識してかかわることの大切さを大倉先生から助言していただき、前に進むことができました。

これからも自分なりにエピソード記述をして、心の育ちに目を向けることの大切さや、そのためには子どもにどのようにかかわっていけばいいのかを全職員で考える場をつくっていききたいと思います。そして保護者に対しても、目に見えない心の育ちの大切さを伝えていきたいと思っています。このような研究の場に参加させていただいたことを深く感謝しています。

***** 松本 博美 泉山幼稚園（私立幼稚園）*****

「子育て支援」という言葉が社会全体の中でよく耳にするようになった現代。自身も園の中の子育て支援・未就園児クラスを担当していますが、では実際に子育て支援とは何なのか…。その言葉の中には様々な意味が隠されており、実際に研究会に参加させてもらう中でそれが一つずつ見えていきました。

様々な立場の研究会メンバーの先生方から話を聞いたり、施設見学に伺ったりする中で、自身が出会ったことのないような厳しい境遇の中で子育てをされている保護者がいたり、そういった方達に地域や保育園からはどのような支援がなされているのかを知ることができました。その上で自分が自園で行っている保育に活かすことができ、保護者とのかかわり方も変わっていきました。まずは保護者が求めているものは何なのか、それを見極めることが大事である。ただ話を聞いて欲しいだけなのか、その次の援助を求められているのか、今、支援が必要なのか、ゆくゆくは必要になりそうなのか等…。こちらの独りよがりな支援にならないように気を付けることが出来るようになりました。

またエピソード検討では鯨岡先生や大倉先生のお話から多くのことを学び、それを通して様々な視点から親子を見つめることが出来ました。この研究会で学んだことを一つでも多く、これからの子育て支援に役立てていきたいと思いました。

研究メンバーのみなさん！！たくさんの刺激と学びをありがとうございました。

***** 村上 ちひろ 京都市立伏見南浜幼稚園（市立幼稚園）*****

当初、クラス担任である私は“子育て支援”は、主に未就園児クラスの担当者や園長が進めていくもので、その目的は遊びの場を提供し、自園のことを知ってもらうためにあると思っていました。しかし、本プロジェクトに参加させていただき、私の考えていた“子育て支援”はとても狭義なものだったと知りました。今まで、園では保護者・地域そして教職員が心を通わせ、同じ方向を向いて子どもの育ちを応援する、という姿勢を大切にしてきました。このことそのものも“子育て支援”の一つだったのだということが分かりました。

特に印象に残った研修としては、エピソード検討があります。時間的経過で子どもの育ちをとらえることが多かった私にとって、その時、その瞬間での自分と子どもや親の心の動きを深くとらえることは、とても新鮮なものでした。この研修により、日常保育や保護者また教職員同士のやりとりの中でも“心の接面”をどうつくっていくかを意識するようになりました。

また児童相談所の業務や保育所の地域子育て支援事業などについて学ばせていただく中で、子どもたちを取り巻く様々なネットワークがあること知り、幼稚園もその中の一つの施設として、必要に応じて、他機関と積極的に連携していくことが必要であると強く感じました。

***** 森 希美子 京都市立伏見住吉幼稚園（市立幼稚園）*****

研究プロジェクトに参加した当初、子どもたちに対する保育を見直し、子どもたちの成長した姿や嬉しかった姿を伝えることが子育て支援につながると考えていました。しかし、研究を深めていくうちに、子どもたちに対する保育はもちろんであるけれども、保護者の方々を支えていくことが大事であるということがわかっていきました。保護者の方たちのがんばりや悩みに共感したり、受け止めたりすることも子育て支援の上ではとても重要であり、また保護者の方が自分の力を発揮できる場をつくり「〇〇くんのお母さん」ではなくしっかりと名前を呼ばれる機会をつくっていくことも大事であるとわかりました。そのことを心に留めてかかわることで、今まで園長がしていた保護者支援の姿勢の中にある思いにも気付くことができ、自分自身も保護者の方の悩みをしっかりと受け止めてかかわろうとするようになり、今までよりも保護者の方たちとの距離が近づいてきているように感じます。こちらが受け止めようとする思いがあることで、保護者の方も様々な思いや子どもに対する悩みや不安を伝えて下さるようになり、そのことを共に考えることが子どもたちの成長にもつながっていくことを改めて感じる事ができました。今回学ばせていただいたことをしっかりと心に留めながら、今後、子どもたちはもちろん、保護者の方々も支えていくことができるように努力をしていきたいと思いました。



***** 山本 絹子 同志社幼稚園（私立幼稚園）*****

子育て支援というものについて、大勢の人を集めてのイベント形式のようなものしか知りませんでした。保育所での個別訪問や訪問された方々の気持ち、支援が継続されていく中で保護者の気持ちや行動の変化を知る中で、保護者の思いを丁寧に受け止めることの大切さを改めて感じました。また、自分自身もエピソード記述を書くことで、保護者の思いを丁寧に受け止めるとはどういうことなのかということや保護者に対しての思いやりや励ましの言葉が足りず、指導者のように振る舞おうとする自分がいることに改めて気付くことが出来ました。

実践の場では、保護者と話をする中で、本当に求めている事、悩んでいることを知りたと思うようになり、質問の仕方を自分なりに工夫したり、子どもに対しても、行動をしたときの気持ちにより目を向けたりしたいと思うようになりました。

しかし、思うように時間が取れず、保護者の思いをしっかりと受け止めることが出来なかったり、継続が中途半端になったりすると歯がゆさを感じるようになりました。自分の保育についての冷静な振り返り方を教えていただいたと思います。また、様々な支援の形式や方法があることを知ったことが大きな力になったと思います。今の状況で出来る限りの支援の工夫を常に忘れないようにしていきたいと思います。



第3 研究プロジェクトのまとめ

第3 研究プロジェクトのまとめ

1 研究プロジェクト報告会の総括

(1) 日時・内容

開催日 平成27年1月26日（月）

会 場 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

内 容 ア 子どもの育ちの連続性研究プロジェクトの報告

イ 子育て支援研究プロジェクトの報告

ウ 大倉得史研究アドバイザーからの各プロジェクトへの講評

エ 鯨岡峻スーパーバイザーからの総評

(2) 報告会の目的

平成27年1月26日に、市内の保育士・幼稚園教諭をはじめ、子育て支援団体の方や京都市内外の行政関係者等の参加者を得て、「研究プロジェクト報告会」を開催しました。

この「報告会」を通して、こどもみらい館での共同機構としての研究を広く発信するとともに、参加者の皆様からの御意見を伺い、今後の研究プロジェクトの方向性を探っていきたいと考えていました。そして、本報告内容が、保育の質の向上と子育て支援の充実に向けて取り組んでいこうとする各園(所)・関係機関の皆様の一つの方向性になればと願っています。

(3) 報告会までの経過

「研究プロジェクトの発足」で記したとおり、こどもみらい館における研究は「共同機構」としての取組です。したがって、報告内容も、こどもみらい館単独ではなく、各研究プロジェクトに参加するプロジェクトメンバーの総意であると同時に、「共同機構」としての意見を反映したものでなければなりません。このため、各研究プロジェクトにおける議論とともに、こどもみらい館企画推進会議（研究・研修部会含む）においても様々な御意見を頂き、研究を進めてきました。

また、研究アドバイザーの大倉得史先生からは、エピソードの書き方から教えていただき、エピソード討議ではテーマに迫っていけるように御助言いただきました。そして、企画推進会議座長でもある鯨岡峻先生をスーパーバイザーとしてお招きし、エピソードとその討議内容、その他の議論等について全てお伝えしてくる中で、保育や子育て支援の根本を教え導いていただきました。

平成26年1月には「中間報告会」を実施し、こどもみらい館企画推進会議の委員の皆様これまで取組内容を報告するとともに、大倉得史先生からはそれぞれの研究プロジェクトの講評（第2章参照）を、鯨岡峻先生からは総評（第2章参照）を頂きました。それらを心に留め、平成26年度は、再考して進めてきました。

(4) 講評と総評

ア 大倉得史研究アドバイザーからの講評

(7) 子どもの育ちの連続性研究プロジェクト

① 子どもの育ちに関するグループ

第3期は、保育の場と学校教育の場をつなぐキーワードとして、子どもの中に自信や自己肯定感をいかにして育むかという観点を中心に据えるところからスタートしたが、研究グループがまずぶつかったのは、そもそも自信や自己肯定感とは何かという問題だったようである。自信や自己肯定感の育成という、しばしば「子どもに『〇〇ができた』という成功体験や達成感を味わわせる」とか、「小さなことでも褒めて、子どもをその気にさせ、頑張る力を身に付けさせる」といった安易な保育に傾いてしまう。そこをどう脱却できるかに注目していたが、「子どもの育ちに関するグループ」は、詳細なエピソード記述とその検討会を繰り返して、乳幼児期における自信や自己肯定感の「かたち」とは一体どんなものか、そしてそれを育むためにどんなかわりをしていったら良いのかを、(少なくとも参加メンバーの手応えとしては) かなり明確に掴めるようになったと感じる。

乳幼児期の自信とは、何かができることで自分に価値があると感じるような「条件付きの自信」ではなく、何ができるが、何ができまいが、自分はありのままでここにいて良いのだという「無条件の自信」である。また、それは子どもの内部に周囲から独立して存在するような「力」や「属性」ではなく、「何かできて嬉しいときにも、できなくて悲しいときにも、何もやりたくないときにも、自分の気持ちを分かってくれる他者」の存在、他者への信頼感と不可分である。本来、個に閉じられたものではなく、周囲に開かれたものである自信を、「子どもが安心して生き生きと暮らせているときの、その心もちの全体」としてとらえるに至ったのは、大きな成果だったと思われる。

したがって、ポイントはむしろ子どもが何かをできないとき、負の姿を見せたときに、いかにそれを受け止めていくかという点にある。実際は「できないとき」ばかりが、自信が育まれる場面というわけでもないのだが、「できた場面」に注目しがちだった当初の反省を踏まえて、対照的な場面にあえて目を向けていった戦略は、問題の中心をあぶり出すために有効だったのではないだろうか。

今後の課題としては、まず、こうして参加メンバーの手応えとして把握した自信のイメージを、いかに他の保育者、教師、そして保護者に伝えていくかということが挙げられるだろう。N君のエピソードで言えば、「ありのままの姿でここにいていいんだ」「先生は自分の気持ちを分かってくれる」「先生と一緒に安心」「先生大好き」「これ、ちょっとやってみたい」「それはもう自分でやるんだ」「他の子と一緒に遊ぶって楽しい」といった諸々の感覚が、すべて自信の一側面だということになる。「自信とは〇〇ができるという感覚のこと」といった固定観念を持っている人々に、これらの細かな感覚が発生してくる流れと、それらが人々のイメージし

ているような自信へとつながっていくプロセスを、全体的な見取り図とともに示せるかどうかということが、その際の一つの鍵になるように思う。

もう一つの課題は、自信や自己肯定感が子どもという個の内部に閉じたものではないことが明らかになった今、子どもの「中」に自信や自己肯定感を育むことによって、保育と学校教育のギャップを乗り越えさせるという発想を、一部見直していく必要があるということである。保育時代に、先生や周りの子とのあいだで育まれた自信（安心して生き生きと生活できる感覚）は、学校現場での人間関係のありようによっては、ついばまれてしまう可能性がある。諸々の学校不適応の原因のすべてを、子どもの中に自信や自己肯定感が十分育っていなかったからという形で、子どもに帰属させるわけにはいかない。保育現場と学校教育現場とで密に連携し合って、子どもを取り巻く人間関係のありようが連続したものとなっていくような配慮・工夫をしていくことが、実は子どもの自信・自己肯定感の育ちそのものなのだという視点を持つことが重要であろう。その際の一つのキーワードは、もしかすると「地域」ということになってくるのかもしれない。そうしたより広い観点に立って、心の育ちの展開を跡付けていくことが、今後の目標だろう。

② 保幼小連携グループ

保幼の5歳児と小学校の4年生による「いっしょにあそぼう会」という交流事業について、事前研、事後研、当日の子どもの様子のエピソード検討会などを行っていくところからスタートした保幼小連携グループの課題は、「交流事業が成功裏に終わり、子どもたちも楽しめた様子だった」というところから一步踏み込んで、一人ひとりの子どもの育ちにとって、それがどのような意味を持っているのかを明らかにしていくこと——そのようなことを、中間報告会で指摘した。そう言いながらも、内心、「交流事業だけに注目していても、子どもの育ちの連続性を保障していくことは難しいのではないか」といった思いを抱いていたのだが、後期には、Q君という一人の男児について、幼稚園でのエピソードと小学校での様子について情報交換をし、その育ちの連続的展開を見ていこうとする検討会が実現した。まず何よりも、そのこと自体が、これまでの交流事業を中心とした保幼小連携から、個々の子どもの育ちを連続的に取り押さえていくための真の保幼小連携への、大きな一歩であったように思う（もちろん、前者が不要だと言っているわけではなく、後者の文脈の中で前者の意味を探っていくことが、真に求められることであろう）。

また、その検討会の中で、小学校側が保育の現場に期待することと、保育の現場が大切に育みたいと思っていることが、案外近いのではないかという視点が得られたこと、その一つとして多様な生活経験が挙がっていたが、保育の現場でそれを豊かにするためにどんな工夫をしていけるのか、また勉強が苦手な子どもに対して学校教育現場はどのような形で「勤勉性」の感覚（小学校期の自信の「かたち」）を育んでいけるのかといった、さまざまな問題が浮かび上がってきたことは、育ちの連続性について考えていく上での重要な成果であった。

今後の課題として挙げられるのは、まず何よりも、今回実現したような形での検討会を継続・発展させていくことであろう。Q君一人について見ていっても、そこにはまだ解き明かされていない、子どもの育ちをめぐるいくつもの「謎」が孕まれているように感じた。今はまだ、小学校側においてエピソード記述に対する抵抗感が大きいようだが、このような検討会を重ねて、一人ひとりの子どもの背景や心情を丁寧に見ていく視点ができてくると、自然とエピソードも出てくるように思う。保育の現場のエピソード、小学校におけるエピソードを詳細に検討していけば、一人の子どもの育ちの連続的展開過程について、相当の手応えが得られるのではないかな。

今はまだ難しい困難も多いと思われるが、そのような検討会を地道に重ねていくことで、より多くの保育・教育関係者が、より多くの子どもたちの育ちを見ていく中で、さまざまな問いを見出し、活発な議論を行っていくようになることを期待したい。

③ 子どもの育ちの連続性研究プロジェクト

中間報告会では、「子どもの育ちに関するグループ」「保幼小連携グループ」双方に言えることとして、子どもの心がどのように芽生え、膨らみ、発展・分化していくのかを、縦断的に跡付けていくことが課題であると述べた。両グループともに、そのときから一段も二段も研究が深まったことは間違いないが、子どもの心の発展・分化プロセスの全体像が見えるところまでは、まだ至っていない。両グループに対して提起した「今後の課題」に沿ってさらに研究を推し進め、子どもが一人の主体として育っていく道筋を明らかにしていってもらえることを期待したい。

(イ) 子育て支援研究プロジェクト

子どもを産み、育てるということがしやすいとは必ずしも言えない現代の社会状況の中で、保護者の育てるという営みをいかに支えていったら良いのかという問題に対して、これまで相応の実践経験を積み上げてきた人、問題意識は何となくあるもののそのための具体的方法が分からなかった人、ほとんどそのような問題意識を感じたことがなかった人など、子育て支援研究チームにはいろいろな濃淡を抱えた保育者が集まった。そんな中、「何故、子育て支援をしなければならないのか」について率直に意見を出し合うところから始め、関係各所の視察などを通して、現代の保護者がどのような悩み・困難を抱えているのか、見聞を深めていったことは、経験のある人にとってもない人にとっても、問題を明確化する上で、とても有効な入り方だったように思う。自分の園の中で何を行うことが子育て支援につながるのかを、メンバー一人ひとりが考えるようになったことが、今回の第一の成果であろう。

さらに、エピソード記述を通して、保護者とのかかわりの接面でどんなことが起こっていたかを吟味しつつ、具体的にどのような言葉かけや応対が保護者の支えになるのかを検討していったことで、上記で得た「知識」がより「実践的」な形で咀嚼され

ていったように感じる。「子育て力」のない保護者に、経験ある保育者が「アドバイス」をするといった堅苦しい支援ではなく、まずは保護者にとって安心できる居場所を作り、ときに時間をかけて悩みや思いを引き出しながら、いろいろ大変だけれど一緒に子どもを育てていこうという協力体制を築くこと、保護者が子育てをすることの喜びを感じ、人生を歩む一人の主体として元気になれるよう、そっと寄り添っていくことを軸とした支援のスタンスを見出したことは、今回の研究プロジェクトの第二の成果だと思われる。

以上のように、二年半にわたる研究を通して、子育て支援を行っていく上で最も重要な基本的要素（①現代の保護者の実態についての見聞を広め、子育て支援の必要性を理解する、②一人の主体として保護者を受け止め、保護者が本来有している子どもへの自然な愛情が引き出されてくるようサポートする）が確認されたわけであるが、今後の課題として、まだプロジェクトに参加していない保育者たちに、保護者が抱えている諸々の困難とはどのようなものであるのか、どのようなケースに対してどのような見通しを持ってかわるべきかといった、より詳細な実践論・方法論を提示していくことが挙げられるだろう。

中間報告会で、現在置かれている人間関係の中で保護者がどういった孤独を感じているかという関係性の視点と、保護者が一人の人間としてどのような人生を生きているかという歴史性の視点（例えば、保護者の自己肯定感の低さもこの視点のもとで理解する必要があるだろう）とを組み合わせ、そこに個別的事情（子どもの個性や障碍、家族構成、保護者間のトラブル、経済的困窮、一人親としての忙しさ、病気など）を加味して、保護者の「しんどさ」を理解していくような枠組みの可能性について提案したが、そうした形でのより視覚的な理論化を行い、園としてのかかわりの基本的方針を示していくと、より多くの保育者や市民に対して、子育て支援の問題性と必要性、具体的対応策について理解してもらうことにつながるだろう。今回の研究成果を踏まえて、今後、さらに広く適用可能な知見の創出、子育て支援施策の提案、個々具体の対応法の蓄積（この接面では「一般的知見」は必ずしも適用できないことが多いのだが）などがなされていくことを期待したい。

イ 鯨岡峻スーパーバイザーからの総評

(ア) 子どもの育ちの連続性研究プロジェクト

子どもの育ちに関するグループと保幼小連携グループに分かれての研究でした。前者は「自信」をキーワードに、乳幼児期の自信とはどういうものか、またどのように自信が子どもの心に定着するかを、具体的な場面をエピソードに描くことを通して明らかにしようとした取組でした。後者は保幼小の交流の実践において、何をどうつなげるのかをこれも具体的な実践をエピソードに描くことを通して検討するというものでした。

子どもの育ちというと、いかに力をつけるかという議論に傾くのが昨今の傾向です。

力をつけることを巡る議論は「学びの連続性」という議論にも通じ、結局は小学校での学びにどのようにつながるかという議論に流れているのが全国の保幼小連携の動向でしょう。そんな中で、子どもの育ちを「主体としての心の育ち」としてとらえるというこの研究の基本的な方向性は、そうした現行の動向に疑問を投げかける意味を持つものだったように思います。その心の育ちの中でも特に「自信」に注目し、しかもそれを単に何かができるから自信になった、できたことを褒められたから自信になったというような、保育の世界で長年取り上げられてきた「褒める⇒自信」という議論の流れではなく、むしろ気持ちが通い合ったり、安心感を得たりといった他者との関係性が築かれる中で、「ありのままでよい」という主体の感覚と響き合う形で生まれる心として、自信を考えていこうとしたところが良かったと思います。特に、負の事態に対する保育者の受け止め方が、子どもに自信が生まれる上で鍵を握るというまとめは、負の行動は厳しく叱って是正すれば良いという昨今の保育現場の動向を視野に入れれば、とても大きな意義を持つもののように思われました。

そうした考えを裏付けようとして紹介されたエピソードは、発達に気懸かりな面のあるNくんを取り上げたものでした。まずここでは、保育者が安易にさっと活動に誘ったり、一緒にして早く結果を作ったりするのではなく、Nくんの気持ちの向かうところを見定めながら巧みに誘いかけ、子どもの内面から「自分で、自分から」という積極性が出てくるのを期待して待ち、そうするうちにその積極性がNくん実際に現れてくるところをとらえたことが肝心でした。このエピソードは、「頑張らせて結果を出し、それを褒めれば子どもに自信が付く」とこれまで保育者のあいだで安易に考えられてきたことを乗り越えて、もっと子どもの心に寄り添ったところで子どもに自信が生まれるところを取り押さえてみようとしたものだったと思います。＜考察＞のまとめは、従来の安易な自信形成の議論を払拭する上にも大変意義深い内容だったと思います。

次に、保幼小連携ですが、まず、高倉小学校の連携に臨む姿勢が大変良かったと思います。全国の保幼小連携の大半は、学びの連続性の議論を土台に、如何に小学校に接続するかの議論に流れて行っています。そんな中で、「入学してくる子どものこれまでの育ちを知ることは小学校にプラスになる」と考えてこの研究プロジェクトに参加していただいたことが、実り多い結果を生んだものと思います。Qくんのエピソードを軸に具体的に討論を重ね、そこから導かれた＜考察＞はこれまでの保幼小連携の研究ではほとんどお目にかかったことのない結論だったと思います。小学校側が保と幼に対して、子どもの内面の育ちを求めているというのは、私自身の驚きでもありました。これまではほとんどが、「〇〇をできるようにして来てください」という小学校側から保や幼への要望だったからです。それに対して保と幼からの要望は、当然と思われる内容でした。今回の保幼小連携では、図らずも心の育ちが共通の話題になり、その連続性を考える端緒となりました。ここまでくれば、保や幼が小学校に提出する要録と小学校が書く要録との連続性を議論する素地ができたと言ってもよいかもし

れません。私の頭の中では、担当者が1年ごとに一人ひとりについて要録を書き、それを小学校が引き継いで、主体としての心の育ちの要録を1年次ごとに書いて、次の年次に送り、さらにそれを中学校まで引き継いで、義務教育が終わった時点で子ども本人にそれを返すというのが本来の要録の在り方だと思っています。それこそ「育ちの連続性」を明らかにするものではないでしょうか。

(イ) 子育て支援研究プロジェクト

まとめを読んでみて、まず子育て支援の場の視察や見学を通して、保護者の悩みに答えを出すのではなく、保護者同士をつなぐこと、保護者が自分で考えたり、自分で問題に気付くことができたりするように導くこと、と纏めたところがとても良かったと思います。子育て支援というと、子育てを肩代わりして保護者のレスパイトのニーズに応える、保護者が集うための場を提供する、楽しく集えるように工夫するというような、行政主導型の表面的な支援、つまり「援助」の視点からの議論が多かったからです。こうしたまとめを読むと、保護者が一個の主体であることをまずは尊重し、主体として子育てや人との付き合いを自ら学ぼうとする機会を提供することが支援なのだと改めて気づかされます。保護者自身の主体としての育ちにまだ十分でない面があるときに、その主体としての育ち直し、生き直しの機会になるように子育て支援が考えられるようになったところに、これまでの子育て支援を一步踏み越えるところがあったように思いました。

こうして見てくると、こどもみらい館の二つの研究プロジェクトは独立して進められたにもかかわらず、大きく重なってくることが改めて分かると思います。子どもの育ちの連続性研究プロジェクトが取り組まれたのは、心の面の育ちが「いま、ここ」で大事だからというばかりでなく、遠い将来（大人になってから）必要になってくるからという展望もあったはずだからで、主体としての心の育ちが、保護者になったときに改めて問われてくることが分かります。主体としての二面の心（「私は私」と「私は私たち」の二面の心）が十分に育っているとは言えない保護者が、子育てに回ったときに、それまでのように自分の思い通りの生活ができなくなり、かなり辛い気持ちになって、子どもに当たってしまうことさえ生まれているのが現状でしょう。そういう保護者への子育て支援が、単に子育ての仕方に関する助言や指導ではないことはいうまでもありません。まずは保護者を主体として受け止めるところ、主体としての自己肯定感が立ち上がってくるように持っていくところが支援の基本にならなければなりません。「保護者の気持ちをしっかり受け止め、子育てに気持ちが向かえるようにすること」というまとめは、これまでの「お店を開く」イメージの子育て支援を乗り越え、保護者の内面と付き合うことを通して主体としての心の育ちを支援するものだという、子育て支援の本質につながる結論だったと思います。このように、保育園（所）、幼稚園の違いを超えて、子育て支援の本質的な課題を浮き彫りにできたことは大きな収穫だったと思います。

次に、子育て支援を具体的に考える上で、一つのエピソードを取り挙げて研究メンバーで読み合せ、内容を確認し合いながら議論を進めたことも、共通認識を導く上で重要なことだったと思います。「みんなそう言ってくれはるんですけど・・・」のエピソードは、一人の母親の内面の機微にまで入り込んで母のしんどさを共有し、そこから母の「怒らないほうがいいんですよ」の問いかけに丁寧に応えていったところは、まさに今求められている子育て支援のかたちであるように思いました。ちょっとした言い方の違いにお母さんに気付いてもらいながら、「こんなのでいいかな」という母に、「そうそう、そんな感じ」というふうに応えていく会話の流れは、簡単なようで奥の深い心と心のつながりがあればこそその展開だったように思われました。

エピソードに見られる支援する側の懐の深さや率直さに接すると、カウンセリングマインドなどと仰々しく言わなくても、保護者を一個の主体として尊重し、主体としての母の思いに寄り添い、それを受け止めるというのは、子どもを前にしたときの保育の基本の心構えと変わらないものであり、保育を通して培ったその心構えがその懐の深さと率直さを導くのだろうと改めて思いました。

厳しい生活状況下に置かれていて、子育て支援の場にも来ることのできない保護者に対して、近年は保健師と連携した訪問子育て支援も試みられるようになってきました。当面は虐待予防がその主旨のようですが、虐待の恐れはなくても、いろいろな事情で孤立して、一人で悩みながら子育てに携わっている保護者に対して、社会が子育て支援の手を差し伸べるべきであるのは当然です。保育に携わる人たちが、そのようなきめ細かな支援に取り組み出していることに、深く敬意を表したいと思います。

(ウ) 両研究プロジェクトを通して

最後に、二つの研究プロジェクトともエピソードを取り挙げて、それを研究メンバーで検討するという研究方法をとっていました。この発表を聞いた参加者が理解しやすかったのは具体的なエピソードをまえに、読み手としてその場面に自分を重ねて考えやすかったからではないでしょうか。気になった場面、ある気づきが得られた場面をこのように丁寧に描いてみると、色々な人が様々な観点から検討を加えることができるようになります。この方法が保育だけでなく、教育や看護など、人が人にかかわる領域全体に広がることを期待したいと思います。

(5) 報告会の成果

報告会では、京都市内の保育園(所)・幼稚園や子育てにかかわる関係機関以外にも、他府県から御参加いただきました。時間の関係上、各プロジェクトともに短い報告となりましたが、これまで取り組んできたことをお伝えすることができました。質疑応答の時間には、有意義な御意見を頂き、アンケートにもたくさんの御意見や御感想を頂きました。それらを踏まえ、次の研究へとつなげていけるようにしていきたいと考えています。

2 研究プロジェクトの総括

(1) 「共同機構」を活かした「実践」に結び付く今日的課題の研究活動

こどもみらい館の「研究機能」については、こどもみらい館の基本理念である「京都市幼児教育センター（仮称）基本構想策定委員会答申（平成8年8月）」に示された「教育・保育内容の向上を図り（中略）実践に結び付ける視点に立ち、調査・研究を行うことが重要」との理念の下に研究を行っています。

こどもみらい館の研究には、以下のような特徴があります。

- ① 保育園（所）・幼稚園，私立・公立の垣根を越えて，共に研究を進めていくことで，それぞれの保育，教育内容を理解し，それぞれが自園（所）の保育，教育について振り返り，保育，教育内容の向上を目指すことができる機会となる。
- ② こどもみらい館企画推進会議（研究・研修部会含む）委員や研究アドバイザーを含めた多くの識者からの御意見を頂き，より今日的な課題を明確にしながら研究を進めていく。
- ③ 研究の進行や方向性を支えていくために，こどもみらい館の主任主事がコーディネーターとしての役割を果たすことができる。

こうした特徴を活かして，子どもを中心に据えた研究を行うことができました。子どもや保護者，一人ひとりの内面（心の成長）に目を向け，子どもの育ちの連続性研究プロジェクトでは「自信を育み，つなげる」，子育て支援研究プロジェクトでは「親子の育ちを支える子育て支援」について研究してきました。

(2) 到達点と今後の研究活動の展望

ア 「子どもの育ちの連続性研究プロジェクト」について

乳幼児期の自信とは，ありのままの自分でいいんだと思える，根本的な自信がまずは大切であり，そこが十分に満たされていることで，自分からやってみようと思える，それら全体が自信だととらえました。

そして，心の育ちは，保育園（所）・幼稚園時代だけ，あるいは小学校時代だけ切り離して考えられるものではなく，一生涯つながっているというとらえを根底に置き，小学校は，乳幼児期の育ちを知り，その上に児童期としての育ちを重ねていくこと，保育園（所）・幼稚園は，子どものその後の育ちを支える大切な土台をつくる責任を負っているという自覚を持ち，その後の育ちを知ることで，自分の保育が本当の意味で子どもの心を育てられていたのかを検証し，保育を見直し，変えていかなければならないと考えました。

また，報告会での講評・総評，参加者からの御感想・御意見を通して，今後の展望として以下のように考えました。

乳幼児期の自信は，保育者が子どもに頑張らせて付けさせられるものではなく，人との関係性の中で育まれてくるものだということは，言い換えれば，人との関係性が良好

に築けないときには育まれないということです。たとえ保育園(所)・幼稚園の時代に「自信」や「自己肯定感」が育っていても、小学校の先生とあるいはクラスの友達と良好な関係を築いていなければ「自信」は崩れてしまいます。

研究主題の設定理由に「就学前と就学後の間に文化の段差はあるものの、それを乗り越えていく鍵となるのは、これまでの遊びを中心とした保育で培った子ども一人ひとりの『自信』『自己肯定感』『信頼感』であり、学校への『期待』と『憧れ』であるのではないか」と掲げているような子ども自身だけに起因するものではなく、周りにいる大人、特に保育者と小学校教諭の子どもに対する眼差しやかかわり、評価の基準の連続性が重要なのではないかと考えられます。同じにそろえるのではなく、それぞれの発達を踏まえた上での連続性です。

そこを深めていくためには、今回2グループ合同で行ったQ児についてのエピソード検討会のような取組を実施していくことが有効だと考えます。

イ 「子育て支援研究プロジェクト」について

保育園(所)・幼稚園が「何故、子育て支援をしなければならないのか」という視点から、子育て支援をすることの本当の意味について知ることから始めました。

自園(所)の支援の知識の範囲内だけではなく、関係機関で行われている様々な支援の実態を自身の目で見ること、また、エピソード検討で保護者や子どもの「心」を見ていくことの大切さを実感することで、今までとは考え方が大きく変容していきました。

保育園(所)・幼稚園の子育て支援では、地域の保護者を支えていくことを含め、在園児の保護者に対しても、まずは保護者を「受け止める」、保護者の思いに「寄り添う」、保護者の話に「耳を傾ける」ことの重要性について共通理解することができました。

そして、保護者が評価的な眼差しを受けたと感じないようにすること、また、保護者の自己肯定感が立ち上がるような支援ができるよう、保護者に対して懐深く接し、子育てに前向きになれるように一緒になって考えられるような支援者であることについても深く意識することができました。

このように支援者としての一人ひとりの意識が保育園(所)・幼稚園やすべての子育て支援の場に浸透していくことが必要になります。

そのためには、保護者の抱える「しんどさ」を理解していく枠組み作りをし、かかわり方の基本方針が示していけるように研究を積み重ねていきたいと考えています。

(3) 結びに

こどもみらい館は、「保育園(所)、幼稚園等が共通するテーマについて共同して研究を行うことを志向し、徐々にその範囲を拡大していく」ことを目指しています。今後も多くの共同機構の保育者の参画を得て、保育実践に結び付く研究をしていきたいと考えています。保育者の専門性の更なる向上と、保育・教育内容の充実、地域の子育て力の向上を目指し、「共同機構」として新たな研究事業を展開してまいりますので、引き続き一層の御支援と

御協力を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、本研究の各々のプロジェクトメンバーをはじめ、アドバイザーの鯨岡峻先生と大倉得史先生には、一方ならぬ御助力を頂き、深く感謝の意を表します。

研 究 体 制

スーパーバイザー 鯨岡 峻（京都大学名誉教授・中京大学客員教授）
研究アドバイザー 大倉 得史（京都大学大学院准教授）

研究メンバー

【子どもの育ちの連続性研究プロジェクト】

子どもの育ちに関するグループ

伊藤芙美子（京都市南保育所保育士）	岩井 京子（自然幼稚園主任）
小林 昭雄（共栄保育園保育士）	佐藤菜々子（京都市立みつば幼稚園教諭）
塚本 真弓（京都市辰巳保育所所長）	坂東 祐子（光華幼稚園教諭）
廣内 厚士（京都市立上賀茂幼稚園教諭）	

（平成24，25年度メンバー）
中島 真野（京都市南保育所保育士）

保幼小連携グループ

おいけあした保育園 京都市立中京もえぎ幼稚園 京都市立高倉小学校

【子育て支援研究プロジェクト】

伊藤 文（京都市聚楽保育所保育士）	小寺 玉枝（京都市九条保育所副所長）
佐々木みほ（ゆりかご保育園副主任）	高島伊代子（稲荷保育園保育士）
植田 亜希（安井幼稚園主任）	松本 博美（泉山幼稚園教諭）
村上ちひろ（京都市立伏見南浜幼稚園教頭）	森 希美子（京都市立伏見住吉幼稚園教諭）
山本 絹代（同志社幼稚園教諭）	

（平成24，25年度メンバー）
池上 孝子（京都市保健福祉局子育て支援部保育課担当係長）

【こどもみらい館事務局】

黒崎 徳江（首席主事）	柳生 和代（主任主事）
渡邊眞里子（主任主事）	

（平成24年度事務局）
高橋由記子（主任主事） 吉田 秀子（主任主事）

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館 第3期こどもみらい館研究プロジェクト報告書

発行日 平成27年3月
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 京都市中京区間之町通竹屋町下る楠町601番地の1
電話 (075) 254-5001 FAX (075) 212-9909
URL <http://www.kodomomirai.or.jp/>